

---

# **超微妙能力で戦場を駆け抜ける！**

アオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！

### 【Zコード】

N8153W

### 【作者名】

アオ

### 【あらすじ】

「願い事を言ってみろ」

そう 見た目ただのおっさんである 神に言われて正直に願い事を言つてみると、いきなり戦いにエントリーさせられてしまった。

どうやらその戦いで勝ち残つたら願いが叶うらしいので渋々参加を決意。

しかし、その戦いが現代科学兵器ではなく超能力を使ったものだと言うからさあ大変。

おっせんからはちやちやつと済ませて来いと言われるし、『えられた能力はもの凄く微妙だし・・・。

極端に弱いわけでもなく、チート並みの強さでもない能力を持つた少年が、今、戦場を駆け抜ける！！

（この小説は一話一話が短いです。ちょっと暇な時にも読んでくれると嬉しいです）

## 第一話 神（おひやそ）との出合

### 夢

人が夢を見るとき、その夢の登場人物は、何に基づいて構成されているのだろうか。

多大なるインスピレーションを持つていれば別だが、大体は知っている人物が出てくるのではないか。

常に妄想を絶やさず、架空の人物の見た目を綿密に考えていれば、その架空の人物も夢に出てくるかもしれない。

実際、知り合いにも何人か、マンガやアニメ、ゲームに出てくるキャラクターが夢に出てきたと言っていた。

そう、俺が言いたいのは、夢に出てくるのは自分が知っているものだけで、自分の知らないものは出でこないという事だ。

そんな当たり前すぎる常識を、なぜ今言つているのかと云つと…。察しのいいやつなら気付いているだろう。

即ち、俺が全く知らない人物が夢に出てきて、拳句の果てに俺に語りかけてきたのだ。

目の前にはおっさんが多い。顎に鬚を蓄え、明らかにやる気とかがいろいろ抜けたような瞳をしている。

「おい、お前には、願いがあるか?」

「・・・」

「おー、」

再度語りかけてこようとする相手に、俺は質問をした。

「お前は誰だ？」

すると、相手が肩をすくめて見せた。

「人に名前を尋ねる時はまず自分から、といつ常識を知らないのか？」

「知つてはいるが、生憎と、俺は得体の知れない奴にこいつらの情報をやるほどお人よしじゃないんだよ」

俺の言葉がおかしかったのか、相手はふつと笑った。

「ふむ、確かにお前の言つ事にも一理あるな。ではお前の質問に答えるとしよう。

俺は、神だ」

田の前の神と名乗る男は、自己紹介を済ませるとこちらを見てきた。

「俺は、かみやゆうすけ神谷裕介だ」

「ふむ、知つている」

「知つてゐるのかよ！」

「ああ、知つているとも。お前の生年月日、好きな物、嫌いな物、  
とな」

「だったら、何で願い事なんかを聞いて来るんだよ」

「いやな、俺が知つてるのは自己紹介のときに使つよつた情報だけ  
なんだ。だから、お前の願い事は知らないんだよ」

「つかえねー。え、何ソレ。神様つていつてもその程度？

「その程度とは失礼だな。一応、思考を読み取る事くらいは余裕だ  
ぞ」

「て、勝手に読むなよ」

「うぬせこ。それで、お前の願いは何だ

「そりいえばそんな事を聞いてたな。

じゃあ質問に質問で返すが、それを聞いてどうするつもり

だ

「そうだな。叶えてやる事が出来るかもしけん

「それをするメリットは？」

「そうだな。簡単に言つなりが、娯楽だよ

「は？」

「さて、せつちの質問に答えてやつたんだ。今度こそ俺の質問に答えてもらひつゞや」

「俺の、願い」

俺の頭によぎつたのはある一つの物体。しかし、その外見を知らないのでシルエットみたいな感じだが。

これを言つべきか。ナビ、ちょっと言いたくないなあ。

俺がそんな風に悩んでいると、目の前の神と名乗る男が言つてきた。  
その言葉は、俺の悩みを解いてくれるのに十分だった。

「何を迷つてゐる。願いとは、ある種どんな欲求よりも強いものだ  
わ。ならば、それが叶う可能性があるので。言えばよい」

「俺は、あるものが欲しい」

「ほう、その欲しいものとは」

「それは

## 第一話 神（ねみこと）との戦い（後書き）

初めての方も、初めてでない方も、こんなにちば。アオです。  
この小説は、いつも一話一話が長つたらしい文章を書いているので、  
短い文章も書いてみたいという事で書き始めたものです。  
つまり、何が言いたいのかと言つと、この小説は文才が無いくせに、  
更に慣れない書き方に挑戦しているものだという事です。

拙い文章でしょうが、どうぞよろしくお願ひします。

## 第一話 僕の願い事（前書き）

こんには、アオです。

一応自分の小説では、毎回前書きと後書きを書きます。  
スルーして下さっても大丈夫な内容なので、スルーするのが懸命だと思います。

そして、自分はこれの他にもう一つ小説を書いています。  
自分としてはあっちが主体なので、こちらの投稿が不定期になる可能性があります。

一応、今回はちゃんと書き溜めも作っておいたので少しの間は大丈夫ですけどね。

まあ、そんな感じなので出来たら温かい日で見守ってください。

## 第一話 僕の願い事

「『ペットぷれい』『主人様は私のド・レ・イ』だ

「は？」

「いや、だから。『ペットぷれい』『主人様は私のド・レ・イ』のDVDボックスが欲しいって言つたんだ」

「いや、何それ？つか、そんなんでいいの？」

な、『』いつは何を言つてるんだ。まさか、あの名作（俺も見たことないけど）H-DVDを知らないだと…？

「アホか！あのDVDはなあ、製造過程で工場が吹つ飛んで、製作者サイドにお金が無いからもう作った分だけ売つてしまおうという話になつて、いざ売つてみたらそれがもうかなりの好評で、じゃあえてもう作らないで置こうといふ話になつてしまつた超プレミアDVDだぞ！」

俺が凄い剣幕で言つと、神と名乗るおっさんは腰が引けたようだつた。

「や、そつか。因みにそれって、R指定か？」

サツ

俺は咄嗟に田を逸らした。

「お前、まだ17歳だよな

「なあ神様、こんな言葉を知っているか?」

おっさんの言つ事を無視して、俺は話を切り替えた。  
俺は息を吸い込み、呪言を吐く準備を整える。おっさんも、黙つて  
先を促してきた。

「夢を追いかけるのに、年齢なんて関係ない。(b y俺)」

「やべえ、凄い感動した」

え、うそ?

「よし、お前の願い、しかと受け取った。ただ、一つだけ条件があ  
る」

「……おっさんは真面目な顔つきになつた。

「……見終わつたら、俺にも貸して

「もううんだーー!」

俺達二人は固い握手を交わした。

うん。こいつ、最初からこれが目的だったな。

「あ、ところで、DVDボックスって事は、何話があるんだよな。  
だったらそれらを個別で買えばいいんじゃないのか?」

おっさんの疑問は最もだ。確かに、マニアでなければそういう選択が出来たかもしれない。実際俺も見たいだけなので、それが出来たらその方法を採用してた。

しかし、このDVD、とある問題が

「実はこのDVD、ボックスしかないんだよ」

「は、何でだ？」

「どうも、製作者が最初からボックスだけを売りに出そうとしていたらしく、単品では売ってないんだ」

「そうなのか」

「だから、尚の事ボックスには半端ないプレミアがついてるんだ」

「なるほどなあ」

俺の言葉に頷く神様。はつきり言って、この光景はかなりシユールだ。しかも、内容が内容なだけに。

と、ここでおっさんが唐突に大きく頷いた。

「よし、お前の願いは分かった。少々アレだが、まあいいだろ」

いいだろ？ て、いいのか？ 仮にも神様だろ？ 法律へりこは守らせよ？

「法律など、人間が作ったものであり、俺には関係ない。そして、

人間が神を敬うなら俺は絶対の存在だ。で、お前は俺の許しを貰つたんだ。だったら、問題は無かるつ

俺の心を読んだのか、神様がそんな事を言つてきた。

「じゃあ、お前、Hントリー決定ね」

と、おっさんがこきなじ意味不明なことを言つて呟いていた。

「は、Hントリー？ 何が？」

「あれ、言わなかつたつけ」

「こひで、おっさんが何かとんでもない事をさりとて言つてやつたのだ

「　　お前の願い事を叶える為には、戦場で勝ち残らなくちゃいけないんだ」

## 第一話 僕の願い事（後書き）

すいませんでした。

今日は話が全然進みませんでした。

いくら自分の小説ではよくあると言つてもこれは酷いですね。

何たつて、一話丸々エＤＶＤについてですかね！

でも次回はもう少し話が進みます。

それでは。

## 第三話 ハントリー（前書き）

こんにちは、アオです。

一挙に三話投稿。・・・ついで、じかんのワифがガリガリと削られていく。

因みに小説の話をしますと、今回ほやっと動き出します。

内容は、読んでお確かめください。

## 第三話 ハンマー

「戦場で勝ち残るだつて？そんなの聞いてないぞ」

「悪い。忘れてたっぽい」

忘れてたっぽいって、内容の割りに言い方軽くね？

「まあ別にいいじゃないか。ちょっと行って来てやつやーと勝ち残れば」

いやいや…そんな簡単にはいかないからな！

「無理！戦場で勝ち残るなんて、現代日本で暮らしてきた俺には無理だからー。」

「と聞われても、もうハントマーしかやつたかい

「何勝手なことしてくれてんだよー。」

俺があつさに食つて掛かると、急におつかが真面目な顔つきになつた。

「甘えるなよ。何の苦労もなしに願い事が叶つなんつまうががあるのか」

その言葉に、俺はつづり思ひました。

確かに、何の苦労もなしに願い事が叶つなんつまうがある話があるわけがない。

人は誰しも自分の願いを叶える為に努力をしているんだ。

「どうやら俺は、そんな当たり前の事を失念していたようだった。

「まあ安心しろ。戦場と言つても、別に銃火器や爆発物が飛び交うような場所ではない」

その言葉を聞いて、俺は胸をなでおろすと同時に違和感を覚えた。

「兵器が飛び交わないのに戦場つて、一体どうしたことだ？」

俺の質問を聞くと、おっさんはふむ、と蓄えられたあごひげを撫でた。

「そうだな。ある意味、兵器が使われている戦場の方がまだ簡単かもしれないな」

「なんだよ、もったいぶらずに言つてくれよ」

「お前が行く戦場は兵器ではなく、超能力を使つて戦うんだ」

「は、超能力？」

「ああ。お前の他にも願いを叶える為にエントリーした奴がいる。そして、一人づつ、能力を与えられるんだ。その能力を使って戦い、勝ち残ったものが願いを叶えられるといった所だ」

「なるほどな」

おっさんのかたがたの言つた事は、俺の疑問を解消するのには十分だった。

兵器ではなく超能力を使って戦う。

確かにそれならば戦場と言つても差し支えないだろ？

何と言つても、兵器よりさらに未知の領域なのだ。どんな能力なんかも、どんな効果を持つてゐるのかも分からぬ。

そしてそんな能力<sup>モ</sup>を使って戦うのだ。その戦いは過酷なものとなるだろう。

そんな風に考へてると、おっさんが心配そうに話しかけてきた。

「なるほどなつて、本当に分かつてゐるのか？」

「ああ。おっさんが戦場といつた意味、ちゃんと理解したぜ」

「ほひ、じゃあ言つてみろ」

「まず第一に、与えられる能力の強さだ。人が拳銃を持って撃ち合ひを始めたら、それだけでそこは戦場だ。つまり、最低でもそれぐらいの能力は与えられるという事だ」

俺が一つ目に理由を説明すると、おっさんはほう、と感心したようだつた。

「そして第二に、超能力という未開拓な分野における情報の不足だ。相手がどんな能力を持っているのか。又、その能力の弱点、長所、対処法といった内容は分からぬ。兵器を使った戦争で例えるなら、

例え相手の武器が分かっても、生身の状態では現代科学には勝てない。この二つは違う事を言つてるようと思えるが、対処が出来ないところでは一緒だ。そして、それがあるからこそ戦場となつたの

「俺が言い終わると、おっさんは驚きに目を丸くしていた。

「凄いな。あれだけでここまで分析するとは。

どうやら俺は、凄い奴を選んだのかもしないな」

最後の方は聞き取れなかつたが、どうやらおっさんは俺に感心しているようだつた。

「それで、俺はあんたの話をちゃんと理解できただか？」

「ああ

俺の質問に神妙に頷くおっさん。どうやら俺の考察は間違つてなかつたようだ。

「よし、それじゃあお前に能力を教えてやる。」机へ来い

俺があつさんの傍に行くと、おっさんが俺の頭に手を置いた。

すると、俺の頭上から光が溢れてきた。

「さて、終わつたぞ」

「もうか？早いな。それで、俺にそんな能力を教えたんだ？」

俺は若干興奮しながらおっさんに問いかけた。だって超能力だぜ。

誰でも必ず一度は夢見るものが俺に『えられたんだ。そりゃ興奮するつて。

が、そんな俺の気持ちをおっさんは容易く吹き飛ばした。

「なんもんは知らん

「は？」

そんな俺の疑問を解消するべく、おっさんから理由を聞いたました。

「なるほどな。そういうわけか

「やうだ。お前の能力は後で自分で検索してみるとこい。そり、さつと行って来い」

俺はおっさんに背中を押され、次の瞬間、景色が変わり、目の前には見慣れない景色があつた。

【s.i.d.e -? ? ?】

「さて、これで揃つたか

俺は小僧をほっぽり出した後、ティータイムに入つていた。

「しかし、あいつ結局、終始俺の事おっさん呼ばわりだつたな

あいつ自身、俺の事をおっしゃんとはあまり口に出せなかつたが、心ではメチャクチャおっさんと呼んでいた。

「しかし、あの小僧、面白くしてくれそつだな

これならば、或いは

俺は、もしかしたら訪れるかもしれない未来へと期待を膨らませた。

## 第三話 ハントリー（後書き）

えー、いつになつたら能力バトルが始まるんだと思っている皆様に謝罪を。

すいません。まだそういうのは先です。  
プロローグは、まだあと三話続きます。

長い！と思われるでしょうが、もう暫くお待ちください。  
で、今日は三話投稿したので次話は明日投稿します。  
それでは。

## 第四話 戦いの概要（前書き）

「んにちは、アオです。

今回のタイトルは何のひねりもありません。

所謂直球勝負です。

もつちよつといかした名前を付けたかったんですけどね。

本当、つぶづく自分のネーミングセンスの無さに呆れています。

あと、書いて忘れてましたが、 が並んでるのは時間経過、 ～が並ぶのは回想を表します。

## 第四話 戦いの概要

「よ、っと」

俺は真上に高く石を投げ上げた。

すると、当然石は重力という物理法則に従い、俺に向かって落ちてくる。

「はあ　！」

俺は意識を集中させて、自らの能力を発動させた。

すると、石は俺に当たらず、俺の一メートル上くらいで何度もバウンドしてから静止した。

俺はこじら口問ほど、このように力を磨き続けていた。

何故こんな事をしているのかと言つと、あのおっさんがあなたが言つては

~~~~~

「どうあえず、今からお前を異世界へ転移させる

「は、何でだ？」

「いきなり与えられた能力で戦えというのも酷だろ？だから、参加者は能力を与えられたら異世界へと飛ばされ、そこで能力を貯らすんだ」

「そうか、確かに与えられても使えない意味が無いからな。因みに、練習期間ってどれくらいだ？」

「お前が最後の参加者だからな。お前が異世界に飛ばされてから一週間だ」

「ん？何が今おかしな事言わなかつたか？」

「え、俺が最後？」

「ああ、そうだ」

「・・・因みに、俺より前にHントリーした奴らって今何してる？？」

「ん？多分能力の練習だろ？」

「コイツは何を言つてるんだ？じゃあもしかして、今こいつしてゐるうちに、ライバルはどんどん腕を上げてるってことか？」

「ま、そうだな」

「だつたら早く俺も転移してくれ。今こいつしてゐる間にも相手が有利になつていぐじゃねえか！」

「まあ落ち着け。一応、お前のよくな奴、つまりは一番最後にエンターした奴にもいい事がある」

「まあ落ち着け。一応、お前のよくな奴、つまりは一番最後にエン

「それは？」

「それはだな、お前が飛ばされた世界が戦場になるんだ。ここまで言えども、後は分かるだろ」

「なるほど。つまり俺には能力の上達の変わりに地の利があるとうわけか」

「そういう事だ。ついわけで落ち着いて俺の説明を聞け。まだ終わってないから」

俺が落ち着いたのを見ると、おっさんはこの戦いについての説明を始めた。

簡単にするところな感じだ。

参加者は自分を含めて全部で7人。

最後に残つたものが、願いを叶える事が出来る。

参加者に与えられる能力はランダムで決まる。だが、基本的に自分の器の大きさにあつた能力が与えられるらしい。

参加者の能力の強さなどは、それぞれの器によつて前後する。

能力は使うときに精神力を必要とする。なので、連續して使い続けると気絶するらしい。

勝負の勝敗は、意識を失なわせたかどうかで決まる。

この“意識を失う”の中には能力の多用による気絶も含まれる。

参加者は超能力のほかに補助能力というのも『えられる。

補助能力というのは、主に自身の能力を補助するものであり、精神力を必要とするのもあれば、いらないものもある。

戦いの最中、参加者達は現実世界から居なくなるわけだが、それについてではあつちが何とかしてくれるらしい。

と、こんな所だ。

説明を終えると、おっさんは俺を異世界へと転移させ、そして今に至る。

「はー」

俺は何度目か分からない溜息を吐いた。

俺の能力は、本来ならものすごい力を發揮する能力なのだが、俺が使うとその限りではない。

どうやらこれは、容量の大きい能力が俺の許容量を大きく上回ったため、能力が随分スケールダウンしてしまったようだ。

俺もここに来て、自分の能力の低さを知った時は泣きたくなつた。

器の小さい男つてモテないらしいから尚の事凹んだのも覚えている。

そう、あれは、俺がここに来た時の事だった。

## 第四話 戦いの概要（後書き）

今日はあともう一話投稿します。

連続して投稿するのもいいんですが、時間を空けた方が読者数が増えるんじゃないかという、邪な考えがありませて・・・。

やっぱり書くからには多くの人に読んでもらいたいのが本音ですかね。

評価・感想などお待ちしております。

それでは。

## 第五話 能力詳細（前書き）

ついに、裕介の能力が分かります。

いやー、ここまで長かつた・・・。

本当はもっと早くに書きたかったんですが、説明文とかの都合上・・・。

前にも言いましたが、プロローグはこれを入れてあと一話あります。  
冗長な文章ですが、どうぞお付き合いください。

## 第五話 能力詳細

ここに来た初日、俺はさつそく自分の能力が何なのかを検索した。あのあつさんの言つには、自分の能力の詳細については、自分に問い合わせればすぐ分かるとのこと。

さつそく俺も、言われたとおりにやつてみた。

能力名：“停止”

能力：自分が視認しているものの動きを止めることが出来る。

「ああ——！」

超能力が使える上、更にはこんなに優れた能力が与えられた事に、俺は喜び、興奮した。

しかし、それらは次に来る能力の説明で一気に吹き飛んだ。

注意：能力の容量に対する器の大きさが足りないため、効果が激減。

「　　は？」

今、何て言った？俺が呆けているのにも関わらず、説明が続いてゆく。しかもそれは、俺を更にどん底へと突き落とす言葉だった。

尚、この能力の強さは、本来の10分の1まで低下。

「あ————！？」

頭に響く説明を振り払つかのごとく、俺は絶叫した。

「はー」

とまあ、こんな感じだ。

この後、俺は自分の器の小ささに絶望したりもしたが、取り合えず前向きにものを考えようと言つ事で能力を使いこなすために練習に励んでいる。

「でも、やっぱりなんだかなあ」

俺の能力“停止”は、？ものの動きを止める？といつ能力だが、俺のは動きを止めることなど出来ず、精々？ものの速度を落とす？のがやつとである。

けれど、一応は？小さくしてここまで力が働いてないもの？なら動きを止める事が出来るが、そんな事が出来てもこれから起らるであろう戦いにおいては無価値である。

しかも、俺の能力は、能力の効果範囲が広げれば広げるほど効力が減っていく。

はっきり言って、微妙極まりない。

しかし、能力は弱いが、逆にいい事もあった。

その一つ目が、俺の補助能力にある。

俺の補助能力は、【視覚操作】だ。

【視覚操作】とは、自分の見ているもを自由に見ることが出来るで  
きる能力だ。

この能力の本質は、視覚を制御できる点にある。

この能力を使い、自分が視認したいものを指定する。これだけを聞いてもよく分からぬだろうが、俺の能力“停止”は、自分が視認しているものだけが固められる能力なのだ。

なので、自分の見るものを制御できると言つのは大変便利な技である。

この補助能力が、一つ目の利点である。

そして二つ目が、先程やつた、空中に投げた石を止めた技の事である。

俺は、空間を指定し、動きを止める、事によつて空気の壁を作つたのだ。

この技を俺は「空間停止」と呼んでいる。

他にも、自分が指定した場所にあるもの全ての動きを止める技。これを「位置停止」と呼んでいる。

そして、物体を指定し、その動きを止める（といったか鈍らせる）技、これを「物体停止」という。

これらの技が俺の二つ目の利点だ。

で、これらは何がいいのかって言つと、それは汎用性・応用性の高さだ。

俺は元々、工夫とかそういうのが好きなので、ある種、この能力は俺向きと言えるだろ？

つーか、そう思わないとやつていけない。

何たつて、俺の器が小さいお陰で能力が弱くなつてるわけだし。（視覚操作の方は問題なかつた）

今一度、あともう一回言わう。

「何で、何で俺の器はこんなに小さいんだ――――――！」

「これじゃ女子にモテねーじゃねーか――――――！」

そつちかよ――といつしつ「ハリ」が聞こえたような気がしなくも無いが、多分氣のせいだろ？

「ま、愚痴つてもしょうがないか」

切り替え早ー？といつのも多分空耳だな。

とつあえず、能力の練習はこれまでにして、戦場となる場所を見ておくとしようかね。

## 第五話 能力詳細（後書き）

こんにちは、アオです。

いつものフレーズを後書きに書いてみました。（どうでもいい上に特に意味はないですが・・・）

こんな感じで、前書きと後書きは無法地帯です。

さて、話は変わりますが、今日の投稿はこれで終了です。

次の投稿はいつになるか分かりませんが、次でプロローグはラストです。

## 第六話 決戦前夜（前書き）

こんには、アオです。

これでプロローグは終了です。

次回から本編に入りますが、その前にちょっと問題が・・・。

何が問題なのか気になる方は後書きまでGO！

## 第六話 決戦前夜

空が明るくなり始めている。

練習期間終了まで、あともう少しことを言った所だ。

俺がここに来た時は、太陽が昇つてすぐの朝7時位だったので、多分あと2時間くらいだろう。

俺は、能力の練習もそこそこに、戦場となる場所を2日ほどかけて回った。

地形の把握は思ったより早く終わり、残りの時間を逃走ルートの確保などに使った。

そして、俺がいる世界だが、幾つかのエリアに分かれていた。

まず最初に今俺がいる？海？エリア。

植物や木などが沢山ある？森？エリア。

遮蔽物などが全く無い？平原？エリア。

多少の遮蔽物はあるが、それ以外は砂しかない？砂漠？エリア。

川や湖がある？水源？エリア。

幾つもの家が建っている？民家？エリア。

と、この6つのエリアに分かれている。

食料などは？海？か？森？エリアで。

水分は？水源？エリアで。

そして、雨風を凌ぐときは？民家？エリアで済ませよつと思つている。

実は、この世界にも天氣があり、今は晴れである。

3日ぐらい前にも雨が降つたので、？民家？エリアで寝泊りをした。

といつあえず、この6つのエリアのうち、俺は？海？と？森？エリアを主な拠点にしようと思つていて。

？民家？エリアにしないのは、参加者達も必ずここに来たら家を調べると思つからだ。

もしかしたら、碌に調べもせずに家を吹つ飛ばされる可能性もある。俺は休憩中にいきなり吹つ飛ばされるのは勘弁願いたいので却下。

そして、俺が地味に危険だと考えているのが？水源？エリア。

海の水は海水だし、森で採れる果実に含まれている水分も物足りない感じなので、唯一の水源であるこのエリアには、参加者が常に必ず一人はいるだろう。

他の？平原？と？砂漠？エリアは論外だ。俺の能力ではこいついう遮蔽物がない場所は不利でしかない。

尤も、俺の能力の本来の力が出せれば問題ないのだが、無いものねだりをして意味が無い。

と、思考に耽つていたら、急に空が暗くなり始めた。

『はーい、初めてまして。最後の参加者さん』

声は妙に高いので、女の声に聞こえなくも無いが、男と言われても頷ける感じだ。

『ではでは、開始まであと2時間です。貴方にはそれまで少々眠つてもらいます』

「は、何でだよ？」

『公平にするためです。開始前後には目が覚めるように致しますのでご安心を。他の参加者の方たちも、意識を失った状態でこの世界に転移され、開始前後に目が覚めます』

「なるほど」

だつたら俺に異論は無いな。

『あ、あと、貴方は今いる場所では目覚めません』

「はい？」

どうじうことだ。今いる場所では目覚めないと云う事は、どこかに移動でもされるのか？

『はい、その通りです。こちらも公平を期すため、他の参加者達と一緒に、この世界のどこかにワープしてもいいです』

今の疑問、口には出してないはずだが……。ここに、俺の心を読んだな。といひ事は、この声の奴も神かなんかなのか。

ん、つーかまてよ。今のロイツの回答、ちょっとヤバくね？

「つー事はあれか？他の参加者の近くで目を覚ます可能性もあるって事か？」

俺の能力はただでさえ弱いんだから、そんな事は御免にしつむりたい。

『その点については問題ありません。参加者達はそれぞれ、半径一km以内に誰も居ない場所へと飛ばされるので』

「や、そつか」

それなら安心だ。

『もつ質問はござりませんか？無ければ眠つていただきますが』

「ああ、もつない」

その言葉を言い終えると同時に、俺の意識は遠のき始め、やがて、意識を失った。

次に目が覚めたとき、ここは、戦場と化す。

## 第六話 決戦前夜（後書き）

回答のお時間がやつてまいりました。

問題点とは・・・次章のタイトルが決まらない事です。

なので、一応次章はつくりますが名前は？未定？といつ風にします。

決まり次第変更します。

それでは。

## 第七話 出会い（前書き）

やつとりこれが本編に入ります。

いやーここまで長かった。プロローグが思ったより長くなりました。  
拙い文書ですが、よろしくお願いします。

あ、因みに章タイトルの問題は無事に解決できました。  
お騒がせしてすいません。

## 第七話 出会い

「うーん……」

・  
・

ガバッ！

「エリは…・・・」

俺が田を覚ますと、周りには何も無い景色があつた。

「エリは…・・・？平原？エリアか？」

周りには何も無い、あるのは気持ちのいい風とそこらに生えわたらる名も無き草達（名はあるんだろうが、雑草の名前なんて普通知らなくね？）だけの景色は？平原？エリアに違ひなかつた。

「こんな何も無い所にいたら直ぐに見つかっちゃうな

元々俺は？平原？エリアに用は無かつたので、すぐさま移動を開始する。

これだけ何も無い所では、いつ攻撃されるか分かつたもんじゃない。

「差しあたつては、？森？エリアにでも行くかな」

あそこは障害物もたくさんあるし、何より果実がある。寝起きで若干腹をすかせている身としては、早く食事にありつきたいと言つののが本音だ。

「さて、それじゃあ行きますかね」

どつこいせ（かなり年寄りくさ）が、皆も立ち上がる時は掛け声を発するだろう。ならイーブンだ）、と立ち上がった時に、ふと、首に違和感を感じだ。

シャラリ

「ん？ 何だこれ？」

俺の首には細長いクリスタルのようなものが先端についたネックレスが掛けられていた。

俺が意識を失う前にはこんなものは無かつたはずだ。といつ事は、これは俺が意識を失った時に付けられたものだらう。

「ま、ちょっとカツコイイ感じがするしいいか」

別にこれを外す理由が無いし、外したらなんか危ないような気がしたので、俺はそのまま放置する事にして、？森？エリアへと向かった。

「よし着いた」

道中、誰とも会わないとなく？森？エリアへと辿り着く事が出来た。

しかし、油断は出来ない。

昨日言われた参加者のワープ地点から言って、一つのエリアに一人いるような計算になる。

つまり、I-1のエリアには参加者がいる可能性が高い。

「でもま、そこまで警戒してもアレだし、まずは食料から調達しますかね」

腹の空腹感は減るどころか増すばかりなので、俺としてせざつれと食事にありつきたい。

そんな感じで歩いていると、急に声が聞こえてきた。

「…？」

木の陰に身を隠し、辺りを窺っていると、微かだが声が聞こえてきたような気がした。

取り合えず、相手の情報を探る為にももう少し近づいてみるとしよう。

幸い、俺はここらの地理は詳しいしな。

声のした方へ近づいてみると、声は段々はっきり聞こえるようにな

つてきた。

声からして、どうやら女性のようだ。

そつと、俺は木の幹に隠れ、何を喋っているのか聞き耳を立てた。

「うう、お腹すいたー」

ーーー

俺はずつこになるのを必死に堪えた。

今、何て言った？

もう一度聞くべく、俺は聞き耳を立てた。

「はあー、お腹すいたよ。支給された食料は失くしちゃったし、お腹はすくし……ここ最近誰とも会って話せてないし……ああー、誰か優しい人が食料分けてくれないかなあ」

へー、食料なんて支給されていたのか。俺にはされていなかつたが、多分、ここ地理に詳しいと言つ事で外されたのかもしれないな。

因みに女性の外見はと言つと、160近い身長で、黒い髪を背中の肩甲骨辺りまで伸ばしている。見た目的には俺と同じ年くらいだが、精神面が若干幼い気がするので、実年齢はよく分からない。

・・・それにしても、いろいろと突つ込みたい事がある。

まず最初に、そんなに大事なもの、何故失くした！？

流石に食料は失くしちゃいかんだけ。

次に、バトルロワイヤルで誰かと話したいって何だよ！ 脳みそお花畠か！？

他にも、食料を分けてくれないかだつて？だから、何でバトルロワイヤルなのに敵と食料を分け合つんだよ！－

そしてこれが最後であり、俺が最も言いたい事だ。

食料ならここに生えてるだるーが！－お前の田は節穴か！－？

そう、今も普通に周りの木には果実が生つていて、見た目甘くておいしそうだ。

何だ？ アイツは俺の存在に気付いていてわざとあんな発言をしているのか？

ふむ、そう考へれば納得がいくな。あいつは俺の存在に気付いていて、俺を油断させようとしているわけだ。

ふふん。だが甘いな。さうと気付いてしまえば、ほんのものよ。背後から襲つて早速リタイアしてもひづぜ。

よし、そつと決まれば回り道をしてあいつの背後に

・・・今の音は俺からましてない。とすると

「ハハー。お腹すいたよつー」

・・・確定。ここつは天然バカだ。

しょ「うがな」い、じ「は」一「つ」、姿を現して食料が生えてる事でも教えてあげましょ「うかね」。

「うやつて敵である少女相手にも情けをかける俺は生糞の紳士である。

ところ事で、紳士な俺は姿を現す事にした。

・・・別に、俺もさつと何か食べたいってわけじゃないんだからね！

## 第七話 出会い（後書き）

本当は昨日投稿したかったのですが、私事により出来ませんでした。  
一応、何も無ければ明日も投稿する予定です。  
それでは。

## 第八話 ちょっと強引な接触（前書き）

キツイ。

短い文章書くのキツイ・・・。

やっぱり自分は無駄に長い文章書くのがいいのかなあ・・・。

と愚の今日この頃。

もしかしたらその内短文を諦めるかもしだせんので、注意ください。

まあ、今のところは大丈夫です。多分・・・。

## 第八話 ひょっと強引な接触

「 まざい」

うん。 まざいな。

何がまざいのかって言いつと、こきなり出たら驚かれて攻撃されるかもしれないって事だ。

害意はないのに攻撃されてゲームオーバーなんて洒落にならない。  
人間、突発的なアクシデントには弱いので、どんな行動をするか分  
からないのだ。

だつたら、別に声を掛けないで素通りすればいいと思うだろうが、  
俺にはある考えがあった。

即ち、あの少女を味方に、ないしは同盟を組む事だ。

さつきの発言を聞いた限り、この少女は味方を裏切るような事はし  
ないだろ？。

ま、その推測の四割が勘なんだが・・・。

しかし、若いうちは考える前に行動しろ、とどこかの偉い人も言つ  
ていたような気がするので、まずは行動に移すことにしてよ。

「つーわけで、やってみるか」

ま、いきなり能力を打ち込まれたり、味方にするのを失敗しても大丈夫な策でいくけどな。

「 空間停止」

俺は歩いている少女の足元を指定し、その空間の動きを止めると案の定、少女はその位置に足を引っ掛け、地面に倒れた。

「え、あれ？ もやつ…。」

俺は素早く少女の後ろに回りこんだ。

「動くな」

その俺の言葉を聞くと、相手はびくつ、と体を震わせたが、こちらの指示通り動かなかつた。

「さて、こんな接触の仕方ですまない。」

一応自己紹介をしよう。俺の名前は神谷裕介、

お前は？」

俺が自己紹介をしたのには理由があつた。

その理由とは、相手の警戒心を少しでも薄れさせる事だ。

自己紹介をすれば、多少は冷静になり、考える事も出来る。

「・・・進藤優衣です」

「よし、それじゃあ進藤。」こちらは今のところ君を攻撃する意思は

無い。」の言葉を信用するしないも君の自由だが、できたら信じて欲しい」

「……こきなり背後を襲う相手を信じるとでも？」

「まあ、普通は信じないよな。

つーわけで、少しでも信じてもらいたいから」「ひひやせをやひつ」

そつ言つて、俺は襲う前に採つて置いた果物を進藤とこう少女の田の前に落とした。

「腹、空いてるんだろ？ それでも食べな。

一応言つておくが、毒は入ってないからな

「……」

俺が果物を出した時に反応はしたが、まだ警戒していなかった。

「しようがないなあ。

・・・ほら、これで毒が無い事が分かつただひつ

俺は出した果物を一口かじり、それを渡した。

「・・・毒が無い事は分かりました。しかし、動いてはいけないのなら食べる事は出来ないんですけど」

「・・・嫌味かよ。分かった、俺の言葉を信用するなら動いていいぞ」

「……」

再度黙り込む進藤と言つ少女。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

黙り込む事十数秒、相手はこちらを振り向く事はしないが、俺に意識を傾けたあと、果物へと手を伸ばした。

「よし、交渉成立だな」

「貴方には今までメリットがあつたように思えませんが」

「そんな事は無い。それを手に取つたといつ事は、俺を信用したつて事だらう。これで落ち着いて話をする事が出来る」

「完璧には信用してませんが、取り合はず、私を襲いはしたもののが絶まではさせなかつたので・・・。それらを考えた末の選択です」

「へえ、お前、意外と頭が回るんだな」

「なーあなたは「はいはいその前に」・・・何ですか

「とつあえず、さ。立たないか?立つて、ちゃんと向か合つて喋ろうか。じょないと話がしづらい」

「私を転ばしたのはあなたでしょ！」

「確かにそうだが、俺は動いてもいい、と言ったはずだ。それなお前が倒れこんだままだつたんだろう？何だ、もしかして地面に寝そべりながら背後こにいる相手と話すのが好きなのか？人の好き嫌いについてとやかく言いつつもりはないが、こっちからすると、その状態で話すのって、さつきのような緊張感が無い限りイタイ子にしか見えないぞ！」

「……」

俺がそう言つと、顔を赤くして慌てて立ち上がつた。

そして、パンパンと服を払いながらじりじりを睨み、

「今の私のあなたに対する評価は最悪です」

と、そんな恨み言を言つてきた。

ま、気にはしないけどな。

なにはともあれ、よつやく正面に向いて安全に話す事が出来る。

しかし、じがらを見る進藤の田は怖い。

・・・同盟なんて組めるのか？これ。

## 第八話 わよつと強烈な接触（後書き）

本当はもう少し進めるつもりだったのですが、あれよあれよと書つ間に文字数が増えてしましたので、こんな中途半端な終わり方になつてしましました。

うーん、やっぱり少ない文字で多くを語ると書つのは難しいですね。前書きでも書きましたが、もしかしたらその内文字数がいきなり増えるかもしれません。特に戦闘描写は下手くそなので長いです（予告）。

その内、最初の方と見比べてみたりすると面白いかもしませんね。アレ？段々文字数が増えてるぞ？みたいな。

感想、評価などお待ちしておりますので、是非してください。  
それでは。

## 第九話　俺は鈍感なんかじゃない（前書き）

今日はあまり進展しません。

## 第九話 僕は鈍感なんかじゃない

「・・・」

「・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・」

「・・・お、重てえ！」

何、この空気？ メチャクチャ重いんですけどー？

今、俺と進藤は睨み合ってをしてこる。

原因は俺のさつきの発言にあるのだが、はつさつき言つてこれだと喋りはじめる。

まださつきの方がマシだった。しかし、今さつき

「ねえ、この状態だと喋りづらいから、さつきみたいにうつむき見ないで地面にうつ伏させてくれない？」

「・・・言えねえー！」

ちくしょう、何か、何か会話の糸口さえ見つかれば！

そう思い進藤を凝視していると、ある一つの物体が目に入った。

「これだあああああーー！」

「なあ、それ食べないのか？」

俺が指摘したのは、進藤が持っている果実だった。うん、我ながらナイスじゃね？

「あ・・・」

進藤も気付いたのか、俺が渡した果実へと目を向けた。

「・・・」

「・・・」

果実を見続ける進藤。その視線は、果実の内側、要は果肉の辺りに向けられていた。

もしかして、まだ毒があるのか疑つてているのだろうか。俺が齧つてないことを証明したんだが・・・実は疑り深いのか？

と、ふいに、その視線が俺へと向けられ、俺が何だ?と視線を向けるとまた果実へと向けた。

暫くそれを繰り返していると、進藤が若干頬を赤くして

「あの  
」

「ん、何だ?  
」

「いえ、その・・・  
」

「うん、何だ?見たことない果実だから警戒してるのか?」

そう、進藤が持っている果実は、俺や進藤がいた世界にはないものだった。

俺も最初は食べられるのかと疑っていたが、余りにも腹が減つていたので食べてみたらこれが結構いけっていた。

因みに、果実の種類はこれだけでなく、もうあと2種類ほどある。それぞれ形は同じだが色が違い、味も異なる。

今進藤が持っている果実は紫色の丸型で林檎みたいな味をしている。他にも黄色、赤色の果実があり、それぞれブドウ、パインアップル味となっている。

配色間違えてない?と思ったのだが、まあ仮にもここは異世界だしなど自分に言い聞かせ、納得する事にした。

「その果実は林檎の味がするんだが、もしかして林檎は嫌いだったか?」

俺がそう聞くと、進藤は一瞬驚いたような顔になり、やがて呆れ顔をして遂には溜息までしてくださりやがった。

「ねえ、神谷君って年幾つ?」

「17だが・・・」

「そりなんだ。私と一緒にだね」

「うん、それがどうした?」

「ほう、俺と同い年だったか。てっきりあの発言から中学生か一つ下だと思っていたんだが・・・」

そんな俺の思考など知らずに、進藤はさらに質問してきた。

「いや・・・。神谷君って、鈍い?若しくは友達とかに鈍感って言われない?」

「む・・・」

失礼な。

俺が鈍感だと?

今まで自分がそうだと思ったことはないし、言われた事も無い。

「失礼な。俺は鈍感じゃないし、他人からも言われた事なんて無いぞ」

俺がそり言つと、進藤は軽く微笑み、俺はそれに一瞬ドキリとした。

「なら覚えておいて。神谷君って、ちょっと鈍感だよ

そういう終わると、俺が何かを言つ前に進藤は果実を食べ始めた。  
いつの間にか進藤の視線はそこまでキツイものではなくなり、更には張り詰めていた空気まで弛緩していた。

・・・何で？

## 第九話 僕は鈍感なんかじゃない（後書き）

「こんにちは、アオです。

前書きが適当じゃね？と思つた方、その通りです。  
何かもう書くこと無くなつてきました。どうしよう。  
なら書くなよ、と思いますが、自分はメールには必ず件名を書く変  
人なので、こればかりは・・・ま、たまに書き忘れたり書かな  
い事もあるんですけどね。

話は変わりますが、次回から説明回となります。

一応二・三話で終わらせる予定ですが、どうなるか分かりません。

それでは今回の話について話します（順序が逆ですね）。

裕介ですが、別に鈍感と言つわけではないんです。

ただ、裕介自身は違う理由でやつたので自覚が無いだけです。こ  
れを鈍感と言つ。

一応、自分としては若干鈍感設定でいきますが、もしかしたら若干  
ではなくなるかもしません。「了承ください」

評価・感想などお待ちしております。

それでは。

## 第十話 罪悪感（前書き）

今回の話は割りとメチャクチャです。  
サブタイトルどおりの展開にしようと思つたらこんな感じに・・・。  
今回はいつにも増して稚拙な文ですが、見捨てたりしないでください。

## 第十話 罪悪感

進藤が食べ終わると、さっきまでの緊迫した空気はどうやら。すっかり普通の空気に戻っていた。

「さて、それで神谷君の話って何？」

と、食べ終わって少ししてから進藤が本題を尋ねてきた。

・・・危ねえ、ちょっと忘れかけてたよ。

「ああ、その事なんだが・・・俺と組まないか？」

俺がそう提案すると、進藤は驚いていた。

「神谷君、これってバトルロワイヤルなんだよ。誰かと組んで勝ち残つたとしても、結局最後には戦う事になるんだよ」

進藤は、それなのに組む必要なんてあるの?と田で訴えてきた。

「いやね。別に、俺は願い事はあるけど、そこまでして叶えたいものってわけじゃないんだ。だから、別に負けてもどうって事は無いんだ」

「・・・」

進藤は俺の発言に思案顔となつた。

当然と言えば当然か。何せ、誰かと組むって事は自分の願い事を他

人に預けるという事だ。しかも、預ける相手は別に勝敗なんてビツでもいいと言つていい。

疑うのは当然だし、例え組んだとしても途中で諦められたらそれでお終いだ。

やがて、進藤は顔を上げて俺に聞いてきた。

「神谷君の願い事つて、なに？」

「俺の、願い事・・・」

願い事：『ペット♪ふれい～ご主人様は私のド・レ・イ～』のDV  
Dボックス

・・・

言えねえ！！

どうしよう。そりやあ、あんな言い方したら俺がどんな願い事を持つているのか気になるだろう。進藤のよつに質問してくるのは当然だ。

しかし、俺の願い事は端的に言えばエ DV Dが欲しいといつもの。俺だって紳士の端くれだ。年頃の女の子相手にそんな事言えるわけがねえ。

しかし、ならビツする。

嘘を吐く、といつ手段があるが、俺はあまり嘘といつもの吐きたくない。

なうひうあらへじうあらよ俺へじうあらーーー。

俺のライフカードは

・本日のことを語つ

・嘘を吐く

・軽やかにじまかす

よし、一番下のやつでこいつ。

俺がそう決めて進藤に向おつとすると、俺の沈黙をどう受け取ったのか、進藤は申し訳なさそうな顔をした。

「あ、別に無理に言わなくてもこよ。といつかじめんね。願い事なんて、他人にあんまり言いたくないよね」

「めんね」と申し訳なさそうに謝る進藤。

「わ、俺の方が申し訳ない。といつか居心地が悪すぎる。

しかし　「でも、」と進藤が付け加える。

「でも、これだけは答えて欲しいな。神谷君の願い事つて、悪い事？」

はい、悪い事です。

すいません。俺まだ17なのに調子乗りました。ほんとマジすいませんでした。

と、これまた俺の沈黙をどう受け取ったのか、進藤は慌てて付け加えた。

「あ、いきなり悪い事って言われても困るよね。私が言つてるのは、神谷君が世界征服だとかそんな事を考えてないかなって事なの」

あ、何だ。そういう事。

だったら俺にそんな願望は無い。これには安心して頷ける。

俺が頷くと、進藤は安心したような顔となつた。

「そう、よかつたあ。私、そういう人達が勝ち残らないようこここのバトルに参加したの」

「え？ そんな簡単に信じていいの？」

「うん。私の能力でね、神谷君が嘘を吐いているかどうかが分かるの」

・・・おっそろしい能力だな。

と、俺がそんな事を思つてゐる間に進藤は続けた。

「うん、本当に良かつた。・・・最初はどうかと思つて心配したけどね」

そう言って、意地悪そうにさらを見る進藤。その言葉に俺はさら  
に申し訳なくなつた。

うん、そうだよな。最初、かなり驚かせるような接触の仕方だった  
しな。反省。

「でもさ、私の能力、嘘を吐いているかはっきりと分かるわけじゃ  
ないんだ」

あ、そうなんだ。

でもどうしたんだいきなり？

「だから、最後の方は結局相手を信じるしかないんだ。

ねえ、神谷君、あなたの願いは、他人に迷惑を掛ける事？」

「大丈夫だ、そんな事は断じてない。進藤が思つているような願い  
は持つてなんかいないよ」

俺がそう答えると、進藤は嬉しそうに笑つた。

「そうか、よかつた。神谷君が悪い人じやなくて」

・・・すいません

俺、メチャクチャ邪な願いです。

あなたが眩しそぎます。

だから、そんな田で俺を見ないで！

猛省。

「え？」

「『『ペツト・ブレイン』』主人様は私のド・レ・イ〜』のDVDボッ

クスだ」

没小ネタ

「神谷君の願い事って、なに？」

そう、進藤が真っ直ぐな瞳で聞いてきたので、俺もその瞳を見ながら答えた。

「知らないのか？超プレミアの激レアで極工  
なDVDの事だ」

・・・

同盟は破綻しましたとさ。

## 第十話 罪悪感（後書き）

「こんにちは、アオです。

はい、おもいつきしげダグダでしたね（特に最後の方）。自分の文才の無さに呆れて何も言えません。

もう少し、他の人の書き方を吸収できたらと思っています。今回はあまり説明回っぽくなかったですが、次回はもう少しそれっぽいです。

評価、感想などお待ちしております。

それでは。

## 第十一話 早起きせよ!!文の傳（前書き）

今回のサブタイトルは、合ひてゐるやあ合ひてるんですが、ミスりました。

具体的なことをここで言つと、ネタバレになってしましますので後書きで書きますが、例の如くミスりました。

そんなん気にしないぜ！ という方はどうぞお読みください。そういう方も出来たら読んでください。

## 第十一話 早起きは三文の得

「 なあ、もつそろそろ答えて欲しいんだけど」

あまりにもいたたまれないので俺は話題を変えることにした。

と、俺がそう聞くと、進藤は微笑んで、

「うん。頼りにならないかもしねないけど、私で良ければいいよ」

進藤はちいさな手を差し出してきたので、俺はその手を握った。

「ああ、じゃあよひしくな。優衣

俺がそつまつと、優衣は怪訝な表情をした。

「え、と、何で下の名前なの？」

「これは俺の主觀なんだが、これから背中を預ける相手を苗字で呼ぶつても何か変だろ？だから、名前で呼ぶことにしたんだ。あ、別にこれは俺の我慢だから優衣は気にせず俺の事は好きに呼んでいいぞ」

「うん。神谷君の言つ事ももつともだと想つ。だから、私も裕介君つて呼ぶね？」

「ああ、別に構わない」

と、そんな感じで笑いあつてると、急に俺の腹が鳴り出した。

「・・・悪い。俺、結構腹減ってるんだ。取り合えず、食事にして  
うか」

俺がそう提案すると、優衣は快諾してくれた。

「ま、これくらいあれば十分かな

俺の目の前には山ほど、とうづわけではないが、この島に生えていた  
果実が積まれていた。

「一杯採ったね。これ、私も少し食べていい?」

「いいぞ。というか、優衣の分も採ったからな。あれだけじゃ足り  
なかつただろ?」

優衣は一つ食べただけなのでまだお腹が空いていたが、

この世界の果実は元の世界の果実より若干小さないので、一つだけじ  
や女の子でも物足りないだらう。

「あ、この紫色のやつがさつき優衣が食べたやつで林檎味。で、黄  
色のやつがブドウで赤いのがパインアップル味だから好きに選びな

「・・・配色と味がおかしいね」

「うん、それは俺も思った。でもまあ、この二種はどれも好きだから問題ない」

「そうなんだ。それにしても、これとか見たことない果実なのにスイスイ採つてたし、味にも詳しいし……もしかして、裕介君つて最後の人？」

「お、当たり。そう、何を隠そうこの俺こそが、この世界を知り尽くした参加者だ」

「へー、そうなんだ。いい人と同盟を組んだな

「だな。俺としても、こんなに良いやつと組めたのはラッキーだ」

優衣は今時の女子高生には珍しいくらいに純粹だ。そして、正義感もある。こんなに良いやつと組めたのはほんとにラッキーな事だった。

ふと、優衣の方を見てみると、その首に何かが下げられていた。

その形に見覚えがあるので、俺は優衣の方へとよって確認する事にした。

「ひゃあ。あ、え、えと、ビラしたの？」

「これ

優衣の首に下げられているネックレスに手を伸ばすとすると、突然その手が叩かれた。

「いた！何すんだよ！？」

「何するんだって、それはいつかの呪詞だよ！裕介君いや、いきなつそつこう事するのはじつかと御りよー！」

「何を言つて……」

そう言つて優衣が下げてゐるネックレス（の先端にある細長いクリスタル）を見た。

そのクリスタルは俺のと同じ形をしていた（だから俺も確認しようとしたのだが）。

それ自体には特に問題は無かつた。（いやまあ、俺のと似てるっていう問題があるんだが……）

問題は、その背景にあった。

クリスタルの背景は 谷だった。

いや、うん。現実逃避はやめようか。そり、このネックレス、自分の胸辺りまでの長さなのだ。

ま、要は、クリスタルを手に取ろうとした俺は、端から見れば女性の胸に白昼堂々手を伸ばしている変態なわけで

こんな時、俺が取れる選択肢は一つしかなかった。

「すいませんでした……」

「もう、誤解だつてこゝのは分かつたけど、もう少し考えてよ」

「仰るとおつで」

あれから、全力で土下座した後、必死に誤解を解いたお陰でなんとか事なきを得た。

しかし、俺は自戒の意を込めて正座をしている。かれこれ10分くらいこやつてこるのでうそろそろ足がキツイ。

「で、裕介君が自分のと似てるからつていう理由で手を伸ばしたってこゝのは分かつたけどさ 最初に説明されたでしょ？」

「え？ 説明？」

全くの初耳である。

「え？ 裕介君、説明聞いてないの？ でも、あれは参加者全員にあつたはずなんだけど・・・」

「あ、もしかして昨日のやつか？ だったら、俺も聞いてるぞ」

「昨日のやつは違つんだよ。いや、まあ違くは無いんだけどさ。とにかく、今日ここに来た時、開始の合図の前に説明があつたんだよ」

「え、何それ。初耳なんだけど・・・」

「・・・じゅぢゅ、本当に知らないみたいだね。信じ難い事だけど・・・」

「すいませこ」

「まあここよ。でもわ、だとしても何で聞いてないんだろ?・裕介君、私と違う前に何かやつてた?」

そう言われて記憶を探つてみるも、これと云つて何もやつていない。

「いや、何もやつてないはずなんだが・・・」

「おかしいな。だとしたら聞いてるはずなんだけど」

そう言つて考え込む優衣。

その時俺は、今までの優衣の言動などである推測をたてた。

「なあ、優衣。もしかしたら俺、分かったかも」

そつ言つと、優衣は首が千切れるのではないかと云つ勢いでひきつけていた。

「え? 何? じゅじゅ事? 何で?」

「待て待て待て。とりあえず落ち着け。落ち着いて俺の質問に答えてくれ」

俺が待つたを掛けると、優衣は自分を落ちさせるため2・3度深

呼吸をした。

・・・どうもいこけど、分かりやすいな。コイツ。

「で、質問つて何?」

「ああ。その説明つてのは、俺と出遭つた前であつた?」

「ええと、裕介君とあつたのがアレだから・・・・・・

30分くらい前かな」

「なるほどね

ビビりながら謎は解けたよしだな。

俺が納得したような顔をすると、優衣が「うひを洟めしそうに見てきた。

「ううー。一人だけ理解してないで私にも教えてよ。幸せっていうのは分かち合つた方がいいんだよ?」

・・・幸せな事なのか?これって。

そう心の中で一応ツツ「//」をいれ、俺は優衣に向かって言い放つた。

「ああ、説明を聞いてない理由だけど

寝てたわ、その時間」

## 第十一話 早起きは三文の得（後書き）

「こんにちは、アオです。

今回何をミスったのかといふと、お気付きの方もいるかもしだれませんが、同盟を組む描写が何か軽い事です。

初っ端4行でいきなり結ばせましたからね！自分。あれだけ重要そうにさせながらこの軽さ、これは偏に自分の技量不足です。こんな事になるなら前話で結ばせときやよかつた・・・。

やっぱり変に意地を張るのは良くないですね。初心者とか技量が無い人は特に・・・。

あと、いい加減前書きと後書きがウザイと感じた方は飛ばしてくださいって構いません。ここで重要なお知らせなんてそんなに無いですので、サラッと読んで特に何も無ければ問題無いです。

あと一話ほどで説明回は終わりますので、つまんないと感じている方はもう少しじだけご辛抱ください。

感想・評価お待ちしております。

それでは。

## 第十一話 優衣先生の説明会（前書き）

お久しぶり？です。

作者は風邪を引いてしまい、4日ほどダウンしました。

でも、いつもは一週間以上はダウンしてるので、今回は結構早くに治つた方です。

皆様も、季節の変わり田で体調を崩しやすい時期ですので、お気をつけください。

## 第十一話 優衣先生の説明会

「 え、寝てた？」

「 うん、寝てた」

黙りこくる優衣。

すると、突然大声を出してきた。

「ちよ、ちょっと、寝てたってどういづ事！？ふざけてるの！？え、だって、開始前後に参加者は起きるって前日の説明でもあつたでしょ？」

「あるにはあつたけど、現実にこいつって俺は説明中の意識が無い。寝てたっていうの以外で考えられるのは、誰かしらの能力で意識を無くしてたっていうのだが」

「

「そり、それ。きっとそれだよ」

俺が言い終わる前に肯定する優衣。

まあ、気持ちは分からんでもないけど現実を見て欲しい。

「それはないな。

何故なら、そのままにしておく理由 即ち田の前でぐーすか寝てる参加者を襲わないわけが無いという事と、そもそもとして、短時間で俺の居場所が特定できるわけが無いという事だ

「それは、そうだけビ

」

「それにだ。大前提で、相手の意識を失わせたらその相手はゲームオーバーになるじゃないか

「うひ

「つーわけで、俺は説明中はずつと寝てたところわけだ。ドゥーコー・アンダスタン?」

「おー、いえす。

・・・つじやへへ、何で寝てたのに偉そつなの?..

「俺はこいつでも胸張って生きてるからな。後悔はしない性質だ

「時と場合を弁えてよーあと、後悔はしなくても反省はしてー..」

「遅刻指導でいつも反省文を書いてる俺に対する挑戦状か?いいだろ?、受けて立つー!..」

「だから、偉そうに言わないでー寝坊しなこよつにちやこと睡眠を取りつよーだから説明聞き逃しちゃうんでしょー..」

「お、こりゃ一本取られたな

「・・・・・・・

「すいません[冗談です。以後、厳重に慎重に気を付けさせて頂きま

す」

優衣がとても黒いオーラを発したので、慌てて頭を下げた。

「とりあえず、だ。俺が寝ていた間にあつた説明会についての内容を教えてくれないか？」

「あ、うん、そうだね」

そこで優衣はコホンと咳払いをした。

「えっと、大雑把に分けると、私達参加者がつけていいるネックレスの説明、この戦いについての説明、あとはちょっととした事の説明かな」

優衣がこちらに視線を向けてきたので、俺は先を促すように優衣を見た。

「ネックレスの説明なんだけど、名前はクリスタルって言つたりして。で、このクリスタルにはいろいろと機能があつて、一つ目が“浄化”。これは、クリスタルに魔力を籠めると、体や服とかに付いてる汚れとかを落してくれる能力。着替えとかが無い世界だから、この機能はとっても役立つと思う」

まあ、優衣も女の子だしな。

風呂とかに入れずに何日間もいるのは辛いものがあるだろ？

「で、二つ目が“通信”。これは、神様達が緊急で伝えたい事とかがあつた時に使われる機能で、私達には使えないから、頭の片隅に置く程度でいいと思う。あ、あと今回の説明もクリスタルの通信機能を使って行われたんだ」

なるほど。緊急連絡なんてのはそつそつあるもんじゃないから、この戦いでもあまり使われないであろう機能だな。確かに頭の片隅に置いといても大丈夫な情報だな。

「三つ目　　これが結構重要な事なんだけど、クリスタルは自分で外す事は出来ないんだけど、外すと強制的に意識を失つてリタイアになっちゃうの」

「ほう  
」

「だから、相手の意識を失わせるのには物理的に気絶させるか、魔力を枯渇させる、若しくはクリスタルを外すつていうやり方があるんだよね」

「なるほどねえ」

「これはかなり重要な情報だな。

「あ、でも付け加えると、クリスタルにはあらゆる能力は効果が無いから。何らかの能力で外されたりする心配も無いよ」

俺が頷くと、優衣はそれで、と続けた。

「あとは、“発光”。これは半径50m以内で能力が使われたときにクリスタルが淡く光る機能だね。因みに、自分が能力を使つた時にも光るから」

と、ここで優衣は一旦説明を切り上げた。

「まあ、クリスタルについてはこんな所」

何か質問は？と視線で聞いてきたので、俺は首を振った。

「じゃあ次、この戦いについての説明なんだけど。この戦いには、時間制限があるんだけど、それについての説明は無かつた。何でも、直前あたりで発表するんだってわ」

理由は分からぬけどね、と優衣は続けた。

「他は、この戦いでリタイアした場合は精神体が元の軀に戻るんだって。勝者についての説明も一切無し。それまで通りの生活に戻されるって」

ん？なんか今、よく分からん言葉が聞こえたな。

「精神体？なんだそれ？」

「え？ええと、参加者は全員、肉体から切り離された精神体の状態なんだ。だから、今の私達の肉体は今頃向こうつじや昏睡状態だと思う。それで、戦いに負けた人の精神は肉体に戻されて今までの生活に戻るってわけ」

これはエントリーする時の説明にもあったはずだけど、と優衣がこちらを見てきたので曖昧な笑みで誤魔化した。

あのあっさん、次会つたらただじゃおかねえ・・・

「悪いな。それじゃあ続きを頼む」

「え？あ、ええと。説明はこれでお終い。あとは支給された食料についてと、この世界についての最低限の説明だから」

「やうか、ありがと」

ふむ、これで大体の情報は出揃つた。

けど、優衣の説明であるはずのものを俺は持っていない。

「なあ、食料の支給ついで、参加者全員にされたのか？」

「うん。多分そのはず。私も起きた時に近くに落ちてたのを拾つた感じだから」

「実はさ、俺、その荷物を置いてきちゃつたみたいなんだよ。必要になるかもしれないから取りに行かないか？」

「うん。そうだね。私も自分の荷物を無くしちゃつたし。実はアレ、中には食料以外にも入つてたんだよね」

「やうなのか？」

「うん。なんか色々あって、よく覚えてないけど、何だかサバイバルって感じの中身だった」

「やうか。なら尚の事俺の荷物は取りに行つたほうがいいな

「うるさい。じやあこいつ

「ああ

やつして俺達は忘れてしまった荷物を取りに行へることとした。  
この後起じぬであらう当然の結果について、あまり深く考えず

## 第十一話 優衣先生の説明会（後書き）

「こんにちは、アオです。

ようやつと説明回の終わりです。

次回から動かす予定です。

いやー、ここまで来るのにえつらい時間が掛かりました。

自分は風邪を引いて何日間か投稿をお休みしたので結構時間が掛か  
った感じです。

本当は昨日か一昨日に投稿をしたかったのですが、申し訳ありません。

体調管理には気を付けたいと思います。

あと、今回の話は、前半部分を風邪引く前に書いてたので、前半と  
中盤から後半にかけてまでの雰囲気が若干異なつている可能性があ  
ります。

長くなつてますが、まだ続きます。

えー、今日から投稿を一時休止したいと思います。

理由は簡単。

・・・テストが近いんです。

取り合えず、テストが終わったらまた投稿を再開したいと思います  
ので、それまでよろしくお願ひします。

感想・評価お待ちしております。

それでは。

## 第十二話 炎の襲撃（前書き）

こんにちは、アオです。

皆様、お久しぶりです。ようやつとテストが終わったので投稿出来ました。

え、出来はどうだつて？

finishedでendですよ。もういろいろと終わりましたよ。  
ちょっと今回は点数が低すぎたので、次のテストではもう少し前から休むかもしません。

今日は戦闘描写が入ります。

やつとそれっぽくなつてきた『超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！』  
をこれからもどうぞよろしくお願いします。

## 第十二話 炎の襲撃

「お、あつたあつた

俺が優衣を連れて目覚めた場所で支給物を探す事数分、目的のものを見つける事が出来た。

「中に何が入つててるの」

「いや、お前にも渡されたる・・・」

「確かに渡されたけど、しつかり見てないから」

「そうですか・・・」

「こうしで、俺が優衣にも見えるよつて袋を広げると、優衣が覗き込んできた。

「えーと、ナイフにロープにマッチと・・・なるほど、確かにサバibalな感じのする内容だな」

「でしょ。

「つてあれ、何で新聞紙なんて入つてるんだろう?」

優衣が袋から取り出したのは、特に何の変哲も無い新聞紙だった。

「ああ、多分それは火種だろ?。それで火を付けるって事だろ?」

「へー、なるほど。それにしても、よく火種だつて分かつたね」

「一応言つておくけど、これが正解だという保証はないぞ？ただ、中に入ってるものをみて多少の考察をしただけだ」

「それでも。普通だつたら先ず新聞紙が入つてゐる事で頭をこんがらせるよ」

「まあ、一応ボーカルをやつてたからな」

「あ、そりなんだ」

といつても、もつ過去の話なんだが。

中学まではやつていたんだが、高校に入つてからは時間も余り取れず、辞める形になつてしまつた。

辞める時に、少数の人が送別会を開いてくれて、その時若干目頭が熱くなつたが耐え切つたのを覚えている。

と、そこまで思考をしていると、急に背筋に寒気が走つた。

後ろか！

咄嗟に俺は優衣を巻き込む形で地に伏せ、迫り来る脅威から逃れる事が出来た。

そして、脅威を見たとき、俺は言葉を失つた。

赤。

俺達の頭上には、炎が疾つていた。

「チツ、外したか」

近くから呑々しげな声が響く。

どうやら、その声の主が先の炎の原因のようだ。

「な、何々？何があったの！？」

俺の腕の中にある優衣は状況に頭がついてこないのか、軽くパニックに陥っていた。

しかし、今のこの状況において、それは命取りとなる。俺は急いで優衣に状況を説明した。

「優衣、敵だ。さっきの炎もそいつがやった

「え、敵？」

俺の言葉で多少の冷静を取り戻したのか、落ち着きを見せ始めた。

「優衣、ここは危険だ。一先ず逃げるぞ

俺は急いで優衣を立ち上がらせた。

「おおっと。逃がすか、よーー！」

その言葉が放たれると同時に、またも疾つてくる炎。俺はその動きを目に捉えて能力を発動させた。

「視覚操作、  
制限」

目の前の空間を指定。

瞬間、それ以外は視界に写らなくなる。

「  
空間停止」

指定した空間を止める。

炎は動きを止めて、俺の目の前で止まった。

「なー?」

相手はその光景に驚き、それが隙となる。

俺は優衣の手を握つて最低限の警戒をしながら逃走を試みた。

「舐、めんなあああーー!」

相手は目の前で逃げ去るつとする俺達に能力を発動させた。

「ぐ  
空間停止!」

先程と同じ方法で炎を止めたが、今回の攻撃は更に苛烈だった。

「  
グオオオオオー!」

目の前で止まつた炎は、四つに分かれて四方から襲い掛かってきた。

心中で舌打ち。これが出来たのは余裕からか、本当にそう思ったのかは分からぬが、俺はいきなり窮地に立たされた。

俺の能力、【停止】は、俺の視界に移るものを止める能力なので、こういう他方からの攻撃にはかなり弱い。

相手はそんな俺の能力事情を知らないだろうが、その攻撃は効果が高かった。

「…………、空間停止、回転」

視覚操作を使い、俺の視界を操作、俺が向いた方向の炎が順番に動きを止めていった。

しかし、今回の攻撃は先程言つたように更に苛烈だった。

「ううああああ……」

「…………ぐつ！」

相手が更に魔力を籠めた事により、炎の力が強まり、俺の能力を超えようとしてくる。

俺も更に魔力を籠めて応戦したが、相手のほうが強かつた。

グオ！

俺が最初に止めた炎が俺の能力を突き破り、一ぱいぱいで迫ってくる。

俺は避ける事も出来ないまま、その炎に身を包まれるしかなかつた。

## 第十二話 炎の襲撃（後書き）

突然の襲撃。

迫り来る炎。

さてさて、裕介はどうなつてしまふのか！？

と、いうのは置いときまして、今回の裕介の能力には贅沢にもルビ振りがされています。

一応、他の能力にもやるつもりですが、何かこれやると厨二臭が加速するような・・・。

あ、今回出てきた炎能力者にもルビは振ります。ご安心を。

評価、感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第十四話 逃走（前書き）

今回のサブタイトルは、決死の覚悟でつけました。

何故そこまでの覚悟が必要なのかといつて、もう一度使うような話が出来るかもしれないからです。

ぶっちゃけ、いつか同じタイトルつける事になるんじゃないのかなと危惧したわけです。

そんな感じで手探り状態で進みますが、よろしくお願いします。

## 第十四話 逃走

「ダメ――――！」

俺が炎に包まれようとした時、優衣が突然叫びだした。

優衣は、懐から何か薄いカードみたいなものを取り出し、炎に向かって投げた。

「騎士は戦場にて散る！」

すると、カードが突然爆発を起こし、迫り来る炎を吹き飛ばした。

俺も爆発の余波を受けたが、炎に身を包まれるよりは軽傷で済んだので、直ぐに体勢を立て直す。

「優衣、助かつた。逃げるぞ！」

俺は、優衣の手を握つてこの場からの逃走を試みた。

幸い、相手は一度の反撃に多少驚いてるので、例え数秒間だけの隙だらうとこれを探す手は無かつた。

しかし、ここで問題があった。

「ま、つて。 きやつ

俺の速度についてこられなくなつた優衣が転んだのだ。

「へつー！」

優衣が転んだ事により、自然、手を引いていた俺も体勢を崩す形となつた。

「え、ごめん」

「謝るのは後だ！今は早く逃げるぞーー！」

こんな何の遮蔽物も無い場所では、相手に秒殺されてしまう。

今まで無事だったのは、偏に運の要素が大きいだろう。

「待てやあーー！」

相手も逃げる俺達を追いかけて来るが、今まで逃げ続けたお陰で距離は50mはある。相手がここに来るまであと最低でも8秒は掛かるだろう。

しかし、そんな距離による常識も、この戦いでおいては意味を成さなかつた。

「炎の一本道」  
フレイムロード

「へつー」

相手の能力の炎が、またもやこちらに向かってきた。

「優衣、もう大丈夫だなー？走るぞー！」

すぐさま起き上がった俺達は、その炎から逃げるべく、炎に背をむけて本気で逃げる姿勢をとった。

「行くぞー！ 優衣ー！」

優衣の手を取り、走り出そうとするが、中々優衣が動き出さない。

「おーー！ 句してるんだよー！」

炎は俺達との距離をどんどん縮めていくので、つい怒鳴り声になってしまつ。

「いいの。私を置いて逃げて」

「何言つてんだ、お前はーー！」

優衣は全く動こうとしないので、俺はこれでは埒が明かないと思い 優衣を抱き上げた。

「ちよ、ちよつと？！ 裕介君ーー？」

「うぬせーー黙つてないと舌を噛むぞーー！」

優衣を抱き上げた俺は、後ろまで迫っていた炎を間一髪で躰すことに成功した。

「裕介君、降ろしてー！ 私と一緒にじゃせられりやつよー！」

「うぬせーー！」

優衣が変な事を言い出したので、俺は怒鳴りつけて黙らせた。

「いや、優衣は、先程転んでしまった事を気に病んでるよ」  
「いいか、俺は同盟を結んだ相手を、見捨てたりなんてしない。だ  
ってそうだろ。お互い助け合うための同盟なんだ。なら、優衣がや  
ばくなったら助けるのが当たり前だろ！！」

言い終わり、すつきりした俺は後ろから来る炎から逃げる。

しかし 優衣を抱き上げた事により、すつきよりは動きは速く  
なって若干引き離す事が出来たが 準備運動も助走も何もして  
ない状態でのいきなりの全力疾走なので、直に遅くなつていいくだろ  
う。

そして、その時は思つていたより早く訪れた。

「ぐあーーー！」

炎が俺の背中を舐めた事により、俺の背中が焼け、その痛みで一瞬  
動きを止めてしまった。

「ゴウー

敵は俺とほぼ同じ速度だったのか、距離は相変わらず50mは開いて  
いるが、炎との距離はキス3秒前くらいの距離になっていた。

ここまで、か。

せめて俺の腕の中にいる優衣だけでも守りたい、優衣を強く抱く。

すると、俺の腕の中にいた優衣が、 もぐもぐと動き出した。

「魔ペントラクルを払いし護符！」

またも優衣が炎に向けてカードを投げると、カードが盾の形状を成し、炎から守ってくれた。

「優衣」

俺が優衣を見ると、優衣は申し訳なさそうな顔をして

「わつあは！」めんね。変な事言つて。

私も、裕介君を守るよ

そつ言い終わると、優衣は俺の腕の中から出た。

「わ、早くいこ。逃げるんでしょ？」

「は、わつあまでもたついてた奴が何言つてるんだか

俺が軽口を叩くと、優衣は膨れた面になつた。

「もつ、そんな事言つたら助けてあげないよ？」

「おつと、ビツビツひりひり暢氣に話してゐる場合ぢやないみたいだな

後ろを見ると、敵はもつ距離を詰めて俺達の近くまでやってきつてしまつた。

「はあ、はあ、はあ、ざつした、もう逃げるのは諦めたか?」

「いや、まだ諦めではないな」

俺は「それに、」と付け加える

「諦めてないって言つたら見逃してくれるのかよ?」

息も切れてるみたいだし、俺としては見逃してくれるとありがたいんだけどな

チラリと優衣を見ると、優衣は「くふと頷いた。

「行くぞ優衣!...」

優衣の手を握り、もう一度逃走。

しかし、相手の田の前で背を向けるなど、狙ってくれと言つてゐるやうなものだ。

当然、敵も俺達に攻撃してきた。

「炎の一本道」  
フューバードア

すぐさま俺達へと襲い掛かつて来る炎、それを

「魔を払いし護符!」  
ベンタクル

優衣が守り、俺達は一気に距離を引き離す。

「逃がすか!」

敵も追つてくるが、先程の間で多少の落ち着きを取り戻した俺は、能力を発動させた。

「空間停止」  
フリーズ

狙いは相手の足元。

優衣に使つたのと同じ手段を用いて相手を転ばす事に成功した。

「ぐあ！」

「暫くそこで大人しくしていろ  
フリーズ  
物体停止」

今度は相手自体に能力を発動する。

俺の能力は、本来の力の10分の1まで低下しているので、完璧に動きを止める事は出来ないが、鈍らせる事は出来る。

相手は突然感じる体の異変に戸惑い、俺達はその間に逃走を図る。

今なら倒せるかもしねりだが、相手の能力はおそらく視界に写った場所に炎を疾らせる能力なので、接近は難しい。

倒すとしても、ちゃんと対策を練つてからだ。

そうして今度こそ俺達は逃げる事に成功した。

## 第十四話 逃走（後書き）

「こんにちは、アオです。

ようやくバトルのみたくなつてきました（と言つても、主人公は逃げてるだけですが）。

ここまで来るのに一ヶ月、・・・どれだけ時間をかけてるんだろう。でもこれからは飛ばしていくつもりなので、今までより楽しめると 思います。珍しく自身あり気。

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第十五話 相互確認（前書き）

こんには、アオです。

まさかの約一週間ぶり投稿となつてしましました。  
自分としては、最低でも一週間に一度は投稿しようと思つてるので、そこら辺は安心してください。

ただ、困った事にパソコン使える時間があまり取れません。  
自分は、どうしたら・・・

尚、今回の話は第十三話より前の話となります。  
( 今回は遅れてしまったお詫びとしていつもより多少長めの話です。  
お楽しみ頂けたら幸いです )

## 第十五話 相互確認

時を遡ること數十分前

俺達が荷物を取りに行つてゐる道中、優衣が思い出したよひに尋ねてきた。

「とにかく、裕介君の能力つて何なの？」

「ん？ いきなりどうしたんだ？」

「いや、いきなりつて言われてもや。」

私達、同盟組んだのにお互いの能力知らないでしょ？」

「いやまあ、そうだけど……」

優衣の言いたい事は分かる。

だけど、その聞き方は余りにもストレートすぎるのではないかと。

「はあ、優衣。お前もう少し警戒しよう。いくら同盟を組んだといつても、能力教えてって聞くのは流石にストレートすぎやしないか」

「あ、そう言われてみれば確かにそうだね」

そこで、優衣は「でも」と付け加える。

「何でか分からんだけれど、裕介君なら大丈夫だつて、そう思え

るんだよね

「阿呆。そんな勘を信用するな」

「でも、そういう事を言つて事はわ、裕介君は私に信じて欲しくないの?」

「イシ、屁理屈を・・・。

「やうじやない。確かに信用はして欲しいが、俺が言つてるのはそういうこう事じやなくて、最初に言つたようにもう少し警戒心を持つて欲しいって事だ」

俺がそう軽く説教をすると、優衣は頬を若干膨らませた。

「むへ、そんな事は分かつてゐよ。もう少し信じてくれてもいいの」「…」

俺は色々とシッコリたい衝動を抑えて、優衣に話しかけた。

「まあ、安心しろ。俺はお前が何かしない限り裏切つたりはしない。だからまあ、俺の前だけでは頭のネジを緩ませてもいいぞ」

「ゆるませてつて、ヒドシー。」

「冗談だ」

俺は何か言つてくる優衣を適当にあしりいながら、田覓めた場所へと進んでいった。

「 もう、 意地悪言わないで教えてよ」

「 まあ、 そうした方がいいかな」

「 これから連携とかのためにもお互いの能力については知つておくれ  
必要がある。」

「 後は、 優衣の能力がどれだけ使えるかって所だろうな。」

「 じゃあ優衣の希望通り俺の能力について説明しよう」

「 僕がそいつを刺すと、 優衣はぐっと表情を引き締めた。」

しかし 別に優衣のこいつは素直な所は嫌いじゃなく、 寧ろ好きなんだけど 僕の能力はそこまで大層なものじゃないのでもう少し崩して貰いたいのが本音である。

「 優衣、 僕の能力って結構微妙だからあんまり変な期待はするなよ」

「 応酬を刺しておく。」

「 が、 しかし

「 大丈夫だよ。 ほら教えて」

「 お願いです。 そんな氣体に満ちた目で見ないでください。 僕の能力  
は本当に微妙なんです。」

息を吸い、 優衣を見ながら僕は話しおした。

「俺の能力名は“停止”

能力は？自分が視認しているものの動きを止めることが出来る？

能力だ」

「え、何それ、凄いじゃん」

一気に興奮する優衣。

ああ、過去（とこりても一週間前だけど）の自分の姿を見ているようだ。

あの時の俺は、こんな感じで喜んでたのかな…。

「待ってくれ。実はこの能力には落とし穴があつて、いやまあ俺が悪いんだけどね。で、とりあえず何が悪いのかって言つと、この能力、本来の力を發揮できないんだ」

「え、何で？」

「うひ、凄く言いたくない。でも、言つしかない！」

「・・・その、どうやら俺の器が小さかつたらしく、能力もスケールダウンしたんだ。具体的に言つと、本来の力の10分の1まで下がつた」

「え？」

一気に驚きと困惑とその他諸々を含めた表情となる優衣。

「どうでもいいけど器用な事だな。」

「え、と。因みに、どうやって私を転ばせたの？」

「ああ、それは簡単。暢気に歩いている優衣の足元の空間を止めて、それに足を引っ掛けさせた」

「ああ、なるほど・・・」

優衣は思案顔となり何かを考えていたようだが（「こいつても、俺の能力についてだらうけど）、急に頷いたかと思ひ、「こいつに向き直ってきた。

「大丈夫。裕介君は最後の参加者だからこそこの土地について詳しいわけだし、大丈夫だよ」

あのー、それって俺の能力より土地勘の方が重要って言つてます？

・・・分かつていた事だけど、やつぱり辛いぜ。

とりあえず俺の補助能力についての説明もして、次は優衣の番となつた。

「じゃあ、次は私の能力についてだね。・・・裕介君の能力について散々言つたけど、私のもちょっと微妙なんだよね」

ほう、それは楽しみだ。先程の仕返し、たっぷりとさせてもらおつか。

「私の能力なんだけど、能力名は“トランプ”

能力は、トランプの絵柄によって違うんだよね」

「絵柄、つまりはストートで能力が違うのか」

「へえ、トランプの絵柄の事ってストートって言つんだ。

力名は騎士ファイアは戦場にて散る。能力は、トランプを爆発させて相手を攻撃する能力。次にダイヤのカードの能力名は魔ペンタクルを払いし護符。能力はトランプが盾となつて相手の攻撃を防ぐの」

え、さっきから黙つて聞いていれば何この能力。

メチャクチャ凄いんですけど。

「ちょい待て。凄くないかその能力」

「あー、うん。確かに凄いんだけどね・・・」

なんか歯切れが良くないな。

俺が理由を考えている間に、優衣は説明を続けて、それが終わつた頃に俺はある一つの可能性きもんに思い至つた。

「なあ、疑問に思つたんだけどさ、 その能力つてもしかして消耗品?」

「うう」

しかし、となると確かにアレだな。

びつから無理だったようだ。

俺の能力よりは使えるけど　　といつか殆ど最優ともいえる能力  
だが　　まさか消耗品というちょっと現実的な面があるとは。

もしかして、この戦いに参加してゐやつらの能力も皆似たようなんか？

と、そんな思考は置いといて、これから的事について考へないとな。

「優衣の能力が消耗品なのは分かつた。つーわけでこれからの方針なんだけど、敵と会つたら戦わずには逃げて、それから態勢を立て直した所で戦闘としようか」

戦闘、という言葉にびくっと反応を示す優衣。

「優衣

優衣は微かに震えていた。

無理も無いだろ？、今までの日常からいきなり戦場に放り込まれたんだ。

寧ろこれが普通の反応で、俺だつて緊張していないわけじゃない。

緊張していなわけではなく、寧ろ優衣と一緒に震えたい所なんだ  
が

「大丈夫

俺を気遣つてか、気丈なことを言う優衣。

震えている女子を田の前にして、どうして男である俺が情けない事を言えるのだろうか。

俺がこいつして平気な振りをしていらっしゃるのは優衣のお陰であり、俺も優衣を元気付けなくてはならない。

「優衣、大丈夫だ安心しろ。

俺が、守つてやるから」

しつかりと、そして優衣にちやんと胸へような声で言つて。

すると、震えていた優衣は、ちらりを見上げてきて

「もう、くせに台詞言わないでよ

「さうか、悪かったな」

優衣が元気を取り戻した所で、目的地は直ぐそこ、といつ所まで来ていた。

俺は、さつきの言葉を示すよつて優衣の手を握つた。

「ほひ、あともう少しだ。わざと見つけまおつ

その言葉に優衣は

「うん。」

元気に頷く事が出来た。

おまけ小話

裕介が能力説明を終えて、優衣が裕介をからかつたキツーイ一言

「ねえ、裕介君知ってる?」

「何をだ?」

「器が小さい男つてもてないんだよ

「うるせえ————！」

没小ネタ

「優衣」「

優衣は微かに震えていた。

無理も無いだろ？今までの日常からいきなり戦場に放り込まれたんだ。

寧ろこれが普通の反応で、俺だって緊張していないわけじゃない。

「大丈夫」「

震えている女子を目の前にしてどうして男である俺が情けない事を言えるのだろうか。

俺がこうして平気な振りをしていられるのは優衣のお陰であり、俺も優衣を元気付けなくてはならない。

「優衣、大丈夫だ安心しろ。  
俺が、守つてやるから」

しっかりと、そして優衣にちゃんと届くような声で言つ。

すると、震えていた優衣はこちんこ見上げてきて

「もづ、息、臭いよ裕介君」

## 第十五話 相互確認（後書き）

今回、最後に自分は己の欲望を満たすために妙な事をやつてしましました。

はい、例のシリアルス？モードを完璧にぶち壊してくれたおまけ小話と没小ネタです。

これは前回（第十話）でもやりましたが、説明をしていなかつたのでここに記したいと思います。

- ・おまけ小話

本編で文章の構成とか諸々の都合上カットされてしまったお話。（主にギャグ）

- ・没小ネタ

本編を多少弄つてギャグに主体を置いたネタ。（シリアルスの部分によく出てくる。全面的にギャグ）

- ・ま、こんな感じですかね。

これまでの空気を壊したくないという方は、読まなくても全く問題ない仕様となつておりますので、そういう方は「遠慮ください」。

評価、感想などお待ちしております。

それでは。

## 第十六話 疑問（前書き）

こんには、アオです。

前回これから面白くなる発言をしましたが、今回は割りと地味田です。

と、いいますか、これから少しの間は戦闘はありません。  
ですが、戦闘以外でも面白く書けるよう頑張りますので応援よろしくお願いします。

あと、今回は割りとどうでもいいけど重要な事で「都合主義」が入りますので、「容赦ください」。

## 第十六話 疑問

「ここまで来れば大丈夫だ」

俺達はアイツから逃げ切り、今は？海？エリアにいる。

この世界は、前にも言つたが6つのエリアに分かれている。

各エリアの配置は、五角形の形を思い浮かべてもううと分かりやすいと思つ。

?森？エリアの右隣には？砂漠？エリア、その隣には？水源？、？海？、？平原？と繋がつていて、中央に？民家？エリアが入る。

俺達は？平原？エリアからここまで逃げてきた。

ここは最初から拠点にしようと思つていた場所なので、色々と好都合だった。

「ほら、裕介君、こっち来て。今から治療するから」

優衣はこっちへ来いと手招きをしている。

炎が俺の背中を軽くだが焼いたので、それを能力で治してくれることだ。

「じゃあ後ろ向いて。これなら“3”で十分かな・・・。

傷を癒す聖なる光

ヒール

優衣がそう言って手に持っているトランプを俺の傷に当てる。たちまち痛みは消えた。

「ありがとう。それにしても、本当に便利な能力だな

優衣の能力は“トランプ”で、各絵柄によって能力が違い、更に記載されている数字によつても能力の強さが変わるといつ、俺とは違つて大変優れた能力である。

「どういたしまして。あ、燃えちゃった衣服はどうしようか？」

俺の服は背中の部分が焼けてしまい、なんともみすぼらしい風である。

しかし、服についてははちょっとした考えがあった。

「ああ、その事なんだけど。

「まぐいくかな」

俺は首にかけられたクリスタルに魔力を籠めると、クリスタルは淡く光だしてから光が俺の体を一瞬包み、すぐに消えた。

「え、なにどうしたの？」

「クリスタルの能力を使つたんだぞ　　どうやら成功したみたいだな。

「ほら、背中を見てみろよ

そつ言つて背中を向けると、優衣が驚いた声を出した。

「うそ。穴がふさがってる

「だひひ」

俺は一人納得していると、優衣がこちらを見つめていた。

「もう、一人で納得しないでこれがどういう事が説明してよ

「分かった分かった。これは推測だつたんだが、優衣がこのクリスマルの一つ目の機能、“浄化”の説明の時に、着替えが無いからこの能力は役立つとか言つてたろ」

「ええと、言つたっけ？」

「・・・まあ、言つたという事で話を進めるけど、服が焼けて駄目になつた時にふと思つたんだよ」

「何て？」

「戦いで衣服が駄目になるのは当たり前だろ。何せ、これは少年漫画じゃないんだからズボンだけは残る、見たいな事にはならない。だろ？」

「うん、確かにあのズボンは不思議だよね。なんで破けたりとかしないんだろう？」

「・・・いや、そこかよ

「え？」

「いや、いいよ。説明を続けるぞ。

それで思いついたのが、クリスタルにある“浄化”機能。衣服が  
破けたりするのになんで汚れしか落とさないんだと疑問に思つたん  
だ

「あ、確かに」

「で、とつあえず試しにやつてみたらこれがうまくいったという訳  
だ」

「へー、なるほど」

「しかしそうすると、この戦いつて結構至れり尽くせりだな

「え？」

「だつてそつだろ。ちゃんと食べ物はあるし、衣類だつて一瞬で綺  
麗に出来る。更には雨風を凌げる場所だつてある。ほり、衣・食・  
住の全部がそろつてるだろ」

「言われてみれば確かに・・・」

「一体神は、何がしたいんだ・・・？」

「え  
」

「俺が神に、何故こんな戦いをするのかと聞いた時、娯楽のためだと返答された。仮にその言葉が本当だとして、こんな恵まれた状態での戦いなんて、見てて楽しいものなのか

「それ、は　　」

「まあ、こんな事を今考へても仕方が無いな。今考へるべき」とは、あの炎のやつの対抗策だな」

「　　うん、そうだね」

その時の俺は気付かなかつた。優衣の顔が哀しく、しかし決意を湛えた表情であつた事を・

【 s.i.d.e - 優衣】

疑問に思い始めた。

それは、私が思つていたよりも早かつた。

いや、もしかしたら、最初から疑問に思つていたのだろうか。

今までの行動、言動からして、裕介君はかなり鋭い思考をしている。

きっと、今私が考へているより早くに、この戦いの意味を知る事になるんだろう。

それは　　私の参加理由であり、神様の願いであり、絶対に認めてはならないこと。

裕介君に教えれば、力を貸してくれるかも知れない。

けれど、まだ完全には信用し切れない。

だけど、私の心の奥で、裕介君を信じたいという気持ちがある。

なぜかは分からぬ。だけど、最初に会った時から、この人なら信じる事が出来ると思えた。

だから、同盟を持ちかけられた時もあんなに簡単に承諾できた。

信じたいけど、簡単に信用してはいけないジレンマ。

私は、一体どうすればいいの？

## 第十六話 疑問（後書き）

今回、クリスタルに新たな能力を「都合主義」でつけてしました。自分としても、クリスタルで服も直せるような文章を書いたと思い込み、後から見直してみるとさあ大変。

?やばい！服が直せるみたいな事を匂わせてすらいない！？

という感じで二次創作の伝家の『宝刀』『都合主義』を発動していました。

こういう事が以後無いように気をつけます。

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第十七話 名付け（前書き）

今回は優衣視点の内容となります。  
うまい区切りが無かつたので、今回は（最近の文章量よりは）若干  
短めです。

## 第十七話 名付け

「さて、アイツとの戦闘に備えて対策を」

と言つたところで裕介君は言葉を一旦切つたので、私はそれについて尋ねてみた。

「どうしたの、裕介君？」

「いや、いつまでもアイツとかって呼んでたら分かりづらいになつて」

「それは、確かにそうだね」

「どうやら裕介君は、あの炎の人の呼び名がない事で悩んでいたらしい。

「うーん、一応、こっちで適当に呼び名を考えておくか

一聞するとどうでもいい事だけど、これから先 他にあと4人と出会うところに いつまでもアイツとかだと分かりづらい。なので、この相手の呼び名を考えるのは賛成だつた。

「それじゃあ裕介君、何か良い案ある？」

私が尋ねると、裕介君は一、二分ほど考えてから語ってきた。

「炎」

「え？」

たつぱり五秒間、溜めに溜めた疑問符をぶつけてみた。

「いや、だからアイツの呼び名。炎でどうだ？」

「・・・数分間悩んだ挙句ついやるの?」

「む、ダメか?」

「いや、別に駄目って言つわけじゃないけど、ただ――」

そう、別に駄目って言つわけじゃない。わけじゃないけど、ただ

「ただ?」

「センス無いなあ、と――」

「ぐつ――」

裕介君は私の言葉に精神的にダメージを受けて、がくつと膝から崩れ落ちた。

どうでもいいけど、裕介君って結構芸が細かいよなー。

と、本当にそんなどうでも良い事を考えていると、裕介君はいきなり立ち上がり

「じゃあ優衣、お前何か良い案あるのかよ」

・・・どうやら裕介君の復讐らしい。多分これで変な事を言つたら私が言つた以上に言つてくるに違ひない。それだけは阻止しないと。

「えーーと・・・」

「うん?」

「ヤニヤしながらひりを見てくる裕介君。

・・・ちゅつとカチンときたよー。

「炎道焰君なんてどうかな?」

ほり、と地面に漢字を書いて見せた。

「ぐおつー苗字を付けるだけじゃだけじゃ飽き呪わす、あいつの能力を、遠藤といつ一般的な苗字に当てはめて、更には妙に小洒落た名前までつけてくるなんて――」

だが、と今度は本当に膝から崩れ落ち、地面に手をついて呆然とする裕介君。

・・・えーと、取り合えず――寧な解説ありがと。

「ほり裕介君、元氣出して。裕介君の考えた名前で呼ぶから」

セーフオローをすると、裕介君はひりをキッと睨み

「なんだよ、同情なんていらないんだよ。そつやつて言つて、どう

せ心の中じゃあ『アアツ、なにゴイツのセンス。マジありえないんだけどー』とかって思つてるんだるどつせ！」

えーと、一応突っ込んでおくと、そんな事思つてませんよ。あと、どつせつて一回言つてますよ。

取り合えず裕介君を慰める事数分、よつやく元氣を取り戻した裕介君が切り出した。

「よし、それじゃあこれからアイツの事は炎道つて呼ぶぞ」

うーん、どうやら裕介君の中じゃああれで決定したみたいだ。

私としては、ちょっと変に凝つちゃつてるから恥ずかしいんだけどな。

「あのー、それ採用するの？」

「なんだよ。優衣が考えた名前じゃんか。俺のなんかよりずっといいからこれでいいじゃん」

まあ、どつせ私達の会話くらいでしかその名前は出ないんだし、それでいいか。

ともあれ、あの炎の人、改め炎道君の対策会議が始まった。

## 第十七話 名付け（後書き）

こんにちは、アオです。

今回の内容敵に名前を付けるというものでしたが、これが意外に重要だつたりします。まあ、皆さんはそんな事を言うまでもなく分かってるでしょうが・・・。

これから先で出会う敵たちに、裕介と優衣は素敵なセンスで名前を付ける事が出来るのか？

次回、超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！ 第十八話、『裕介、優衣に一矢報いる』を請うご期待ください。

嘘です。

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第十八話 対策会議（前書き）

展開が遅いですが、これからもよろしくして頂けると嬉しいです。

## 第十八話 対策会議

「それじゃあ改めて炎道の対策を考えるぞ」

「俺がそう切り出すと、優衣の顔が引き締まつた。

「まずあいつの能力だが、あいつの能力は十中八九発火能力で間違いないと思う」

「うん、そうだね」

俺の言葉に頷く優衣、俺はそれを確認して続けた。

「あいつの能力は、おそらく視認した空間に炎を疾らせる能力だろうな」

「見た感じだと、炎が炎道君から疾つてる感じだったよね」

「そうだ。そしてそれがアイツの弱点だ。アイツは視認した空間に炎を発生させるわけじゃなく、あくまで炎を疾らせる能力であるという事が重要だ」

これはつまり、火元である炎道から距離をとればすぐに攻撃される心配は無いという事だ。

炎道と俺の能力は発動条件が同じなため、その弱点も熟知している。

即ち、あいつを倒す策とは

「遠距離からの死角を狙った攻撃。それがあいつを倒す手段だ」

俺の能力は、真正面での戦いにはとことん不利だ。優衣の能力も、戦う事は出来るが回数制限があるためやはり向かない。

基本、俺達の戦い方は背後からの奇襲となる。

そしてこれからについて話そうとした時、ふとある疑問が浮かんだ。

「どうで優衣。お前、あいつと最初戦った時にカードを三枚使つたろ。何番を使つたんだ？」

俺の言つ番号とは、即ちトランプに書いてある数字である。

優衣の能力である“トランプ”は、数字によって能力に差が出る。

上から

A < K < Q < J < 10 < 9 < 8 < 7 < 6 < 5 < 4 < 3 < 2

といった具合だ。

一番上位のAにはかなりの力が秘められているそうなのだが、実はこの能力には困った弊害がある。

即ち、能力の効果が限定数値なのだ。

俺の能力は魔力を籠めればそれだけ停止させる力が強くなるが、優衣の能力はそうはいかない。

消費する魔力量は数字の大きさに比例するが、必要以上の魔力は籠められない。

詰まる所、使つた数字以上の能力をぶつけられたら一巻の終わりといつ事だ。

そういうふた意味では実に不便な能力だが、各能力にはそれを補佐する補助能力があり、この能力にも当然ある。

優衣の補助能力とは “数値化”

目に映るもの、正確には自分が見たいと思った情報を数字に置き換える能力。

これにより、能力の強さを数字に置き換え、それに見合ったカードを使うというのが優衣の常套手段である。

因みに、最初に優衣が俺に言つた嘘が分かるという発言は、この能力を使って俺の心拍数を覗いていたそうだ。

話を戻そう。

さつき俺の背中の治療に使つた番号は“3”なので、まだ大きい力ードは控えている。

「えーと、最初に使つたのが騎士は戦場にて散るの“4”で、あともう一枚は魔ダイヤを払いし護符の“3”と“5”だね」

「なるほどね」

初戦でいきなり三枚も消費したのは痛いが、どれも小さい数字だったのよしとする。

しかし

「これから先は、カードの消費がかなり激しくなっていくだろうな。無駄な消費は抑えておいた方がいい」

「例えば？」

「取り合えず、相手の攻撃は避けるに越した事は無いが、たとえ当たりてもそれが軽い怪我だったらカードは使わずに自然治癒力に任せよう」

「うん、分かった」

取り合えず、今後の方針は決まった。

まず、相手を見つけたら逃げの一手で、余裕があれば優衣の補助能力で相手の強さを見ておく。因みに炎道は、こちらが奇襲を受けたため、ちゃんと見る時間がなかったそうだ。

その事に対しても優衣は

「『めんね。私がしつかり見ておけばもつとしつかり作戦も練れただろうし、それに、弱気な発言なんかもしたりして』

と、先程の事も含めてけなり落ち込んでいたので、俺は優衣の頭に手を置いた。

「大丈夫だ、気にするな。さつきも言つたが、仲間つて言つのは助け合つ為にいるんだ。お互いがお互いをフォローするのは当たり前の事なんだよ」

そつ言いながら頭を撫でてやると、優衣は

「うん、そうだね。裕介君の為にも私、頑張るよ」

「…………」

そつして微笑み、頭を撫でていると、途端に優衣は顔を赤くしながら視線を彷徨わせ、手を妙にバタバタ振り、明らかに拳動がおかしくなり始めた。

「優衣、どうかしたのか？」

「そのう、て……」

ぼそぼそとした声で喋るので、優衣が何を言つてているのかよく聞き取れない。

「え、聞こえないんだけど」

もう一度問いかけると、優衣はさつきつとめた声で言い直した。

「その…………手、下ろして欲しいな」

「ああ、その事か」

言われて直ぐに手を引っ込める、優衣は安堵したような表情となつた。

「うーん、じつこいつの反応をされると結構心くもるものがあるな。

そしてそんな俺の気持ちを知らず、優衣は優衣で胸に手を当てて深呼吸をしていた。

「さて、炎道の対応策は決まった。取り合えず、ここを移動するが

優衣は心底不思議そうに聞いてきた。

「一応、他のやつも調べておいた方がいいだろ。調査だよ」

「あ、なるほど」

優衣は納得がいったよつの顔となつた。

「理解したか。それじゃあ行こつか

「うふ、でも何処に?」

「せうだな・・・」

取り合えず、喉も渴いたことだし

「?水源?エリアに行くか

## 第十八話 対策会議（後書き）

こんにちは、アオです。

今回は優衣の能力説明を更に詳細にした回となつてしましました。自分としても、もうちょっと見せ場が欲しい所ですが（何せ主人公たちは碌に戦いもせず逃げ出しだけですから）、中々機会が訪れません。

しかし、次回を通り越して、次の次くらいにはちょっと見せ場があるかもしれません。（あ、でも、自分は何分考察が好きなもんですから、実際にはもう少し掛かるかもしれません）

それだけを頼みにされると哀しいものがありますが、自分に文才がないのは事実なので、頑張りたいと思います。（まあ、戦闘描写とかがうまいのかと聞かれたら首を捻りますが）

感想・評価お待ちしております。

それでは。

## 第十九話 小休止（前書き）

執筆の都合上省略していますが、裕介は優衣に世界の地形説明をある程度はしています。そこら辺を「了承の上でお読みください」。  
ま、特に意味はないんですけどね。

あ、あと、第五話『能力詳細』で書かれた裕介の補助能力、【硬化】は無しにしました。

いろいろ考えた結果、「これは無しにしよう」という事になりました。（何たつて、“停止”と全く関係ない能力でしたしね）どうも、自分の作品は矛盾と言いますか、そういうのが多いみたいですね。

あまりそういう風にはならないよう努力いたしますので生暖かい目で見守ってください。

## 第十九話 小休止

「 じーが、 ? 水源? エリア 「

俺達は敵と遭遇する事無く、 無事に? 水源? エリアへと辿り着く事が出来た。

単純に考えれば、 各エリアに最低でも一人は落とされた計算となるので、 ここまで敵と会わずに来れたのは運以外の何ものでもなかつた。

そして、 じーへ辿り着いた優衣の反応はといふと

「 す、じー」

優衣はほうと息を吐き、 その光景に魅入つてゐる。

それもそつだらう。

目の前には? 森? エリアほどではないにしろ木が立ち並び、 吹き抜ける風は涼風、 おまけに側を流れる小川の音は、 耳に心地よい響きを『えてくれている。

「 どうだ、 気に入つてもらえたか? 」

俺がそう問いかけると、 優衣は田を輝かせながらじーひりて振り返つた。

「 うん。 こんなに綺麗な場所、 元の世界じゃ中々無いよ

「せうか」

言い終えると、小鳥のさえずりさえ聞こえてきそうな風景に田を戾す優衣。

しかし、実際にはさえずりなんて聞こえはしない。

そもそも、この世界にはさとうやうら俺達しか動物はいないよつで  
当然鳥もいなく だからさえずりなんて聞こえはしないのだが、この風景にはそんな現実を吹き飛ばすほどの威力がある。

「さて、楽しんでいる所悪いが、俺達の目的を忘れていいだろうな」

俺がそう問うと、優衣は惜しそうな表情を見せた後、じりじりと向き直った。

「うん、分かつてゐよ。他の人達を探すんだよね」

「そうだ。<sup>？海？エリ亞</sup>ここまで来る途中では出会わなかつたが、このエリアにも他の能力者がいる可能性がある。俺達の目的は、敵に見つからずに情報を手に入れる」とに他ならない。だから、ここから先は十分注意していくぞ」

「分かつたけど、一つ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「Uのエリ亞は危険度が高いつて言つてたけど、なんで？」

「ああ、その事か」

俺は一拍置いて、説明に入った。

「この世界には、まともに水が飲める場所はここしかないんだ。確かに？森？エリアに自生している果物にも水分が含まれてはいたけど、あれでは足りない。実際に食べてみて、何か違和感を感じなかつたか？」

「確かに、あんまり水っぽさがなかつたかな」

「そうだ。だからこそ、このエリアには人が沢山出入りする可能性がある。そんな場所で無警戒に歩いていたら襲つてくれと言つてゐようのもんだ」

俺の説明に優衣はうんうんと頷いていたが、疑問を感じたのか、質問を続けてきた。

「でもさ、参加者達全員に食料が入つた袋を渡されたでしょ。だったら今はまだそこまで警戒しなくてもいいんじゃないかな。それに、ここに参加者がいるとも限らないんだし」

「確かに。でも、渡された食料だつて、もつて5日分だ。この世界について把握していない参加者達は、まず食料の節約をしながらこの世界を探索する。そんな時にこんな場所を見つけたらどうする？先ず間違いなくここに居座るだらう。そして、このエリアに落とされた参加者は絶対一人はいるはずなんだ。だから、警戒するに越した事は無い」

「へえ、なるほど」

優衣は納得したのか、今度は淀みなぐつをうると頷いている。

「分かつたか。

でもまあ、確かにここはいい場所だ。拠点にするつもりはないけど、ゆっくはするつもりだ」

一応、優衣のためにもフォローを入れておく。すると、優衣は少し照れた風に言つてきた。

「ありがとう、裕介君」

「気にするな。取り合えず喉も渴いてるから水を飲もうが」

「うん、やうだね」

そうして、一人で小川の水を手で掬い、口へと運ぶ。

すると、優衣は感嘆したよひご歴を出した。

「うわあ、すうごにおいしい

「そうか。でもまあ、そこいらの水道水よりは美味しいんだろうな」

俺は味については少し疎いので、よく分からぬのだが、優衣はこの水を氣に入ったようだつた。

一応補足しておくと、俺だって飲み比べれば味の違いは分かるつもりだ。だけど、比べる対象である水道水がないから分か

らないところだけだ。せひ辺、誤解しないように。

「さて、休憩も済ませたことだし、そろそろ再開するが」

「うふ、そうだね」

俺は立ち上がり、優衣に手を差し出すと、優衣は俺の手を握つて立ち上がつた。

「敵に見つからないためにも、周囲に気を配りながらの探索だ。最初からこんな調子ペースだと体力的にも精神的にも辛いだろうからちよくちよく休憩は取るつもりだ。だから

「

頑張ってくれ、と続けようとした所で、ソレは起つた。

ズウウウンー！

「 ッーー？」

「 裕介君、これってーー？」

優衣は突然の地響きに驚きながらも、冷静に俺の判断を待つていた。

ビーブ、優衣の中での俺は作戦参謀といった立ち位置のようだ。

「ああ、近くで戦いが起こっている可能性が高い。

これは、思つてもみなかつた好機チャンスだ」

俺達の今回の作戦は、敵の調査にある。

なので、参加者同士の戦いともなれば、一気に一人。5人中3人と、  
参加者の過半数の能力を知る事が出来る。

しかも、この戦いでどちらかがどちらかを倒せば、参加者が一人減  
り、更に戦いによつて疲弊してくれていればそれを討つ。

俺達に得はあつても損はない好条件だ。これを逃す手はない。

ズウウウンー！

俺が思考していると、先程と同じ地響きが同じ方向から来た。

「行くぞ。ここまで派手にやつているんだ。おそらく、戦っている  
やつらの能力も相当だろう。ここで能力を知つておくに越した事は  
ない」

「うんー！」

そして、俺達は地響きがあつた場所へと足を速めた。せんじょう

## 第十九話 小休止（後書き）

「ここにちは、アオです。

次回、裕介たちは戦いませんが戦闘描写を入れる予定です。

前回に裕介たちが活躍する的な事を言っておきながら戦うのは他か  
よー…というツッコミは無しの方向で。

あ、あと、大分先になりますが、視点切り替えがちょくちょくある  
かもしないという事を今伝えておきます。

まあ、これは頭の片隅に置いといても全く問題はありません。  
あと、ついでにエリアの分布を書いておこうと思います。携帯でも  
ちゃんと見えるように工夫はあります。が、見えづらかったら  
すいません。

?平原?

?海? ?田家? ?森?  
「こんな感じですかね。

?水源? ?砂漠?

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第一十話 最悪の展開（前書き）

今回、物語が急展開を迎えます。

あと、いつになるか分かりませんが、前書きを書かない事態が発生するかもしれません。

これは、物語の都合上、雰囲気上、前書きを書かない方がいいと判断した場合です。

なので、これを楽しみにしている人は（ま、そんな人は少ないですが）『』で承ください。

## 第一十話 最悪の展開

「これは」

震源まで辿り着いた裕介たちは、その光景を見て絶句した。

ある所には、隕石が落ちたかのような窪みがある。

ある所には、何か重いものを引きずったかのような跡がある。  
ある所には、何か重いものを引きずったかのような跡がある。  
ある所には、何か重いものを引きずったかのような跡がある。

ある場所の地面は、その部分だけが切り取られたかのように何もない。

ある場所を中心に、生えている木はへし折れている。

そして、そんな爆心地のような場所に、一人の人物が立っていた。

この光景はどう見てもおかしかった。

そう、そこにいる一人の人物以外何もないのだ。

これだけの惨状、重機でも使わない限り作り出す事は不可能だろう。

しかし、一人は手に小石を持ち、一人は無手で対峙しているだけ。

一人はどちらも男性だが、どうすればあのような装備で、この惨状を作り出す事ができるのだろうか。

普通の感性を持つ者ならば、或いは科学者のような人には、この惨

状を生み出す原因の予測がつかないだろう。

しかし、この世界に集められた人間は普通ではない。  
ヒト

皆、何かしらの能力を与えられている。

それは、裕介たちとて例外ではない。

なので、裕介たちもこれが能力によるものだと理解出来た。

理解は出来た、が、しかしそれまでだった。

一体何の能力を与えられればこうなるのか、それが分からぬ。

現状、裕介と普通の人との違いは、この惨状の原因を理解できているか否か　　ただ、それだけだった。

少しすると、二人の人物が動き出した。

一人が手に持つている小石を相手に向かつて投擲する。

普段ならば多少の脅威であるうソレも、この場を作り出した者においては児戯に等しい。

しかし、変化は突然起こった。

「ジャイアント  
巨大化！」

投擲された小石は突然大きくなり、一秒も掛からずに出石とも呼べる大きさとなつた。

巨岩と化したソレは、真っ直ぐ前に向かっていく。

対峙する相手は無手。それではあの攻撃は防げない。

しかし、相手の方にも変化があった。

いや、相手に変化では語弊がある。

正確にはその周り、その人物を中心とした地面に変化が起こった。

「  
第三の手」

アースハンド

突然地面が盛り上がったかと思うと、それは人の手の形をとった。

手の形をした土は、その人物を守るかのように巨岩を防ぐ。

それだけ。そう、たつたこれだけの出来事で、見ていただけの裕介たちは戦慄を覚えた。

あれは、違う。

何が違うのか、その答えが裕介の頭に出ない。

いや、元々答えは出ている。ただ、裕介はその答えに目を背けているだけだった。

そうしている間にも、二人の戦いは続いている。

殆どが先の攻防と一緒にだが、時折小石を上に投げてはそれが巨

大化し、相手を襲つというのがあった。

その攻撃を受け止める事はせず、ただ回避に専念する。

回避し切れそうになかったものだけを、手の形をしたもので軌道を逸らしている。

この一人の能力は明白だ。

小石を投擲している方の能力は“**巨大化**”。

物を巨大化させるだけの、シンプルな能力。

そしてもう一人は“**第三の手**”

土などを手の形に変形させ、操る能力。

その一人の戦いは、巨大化させるほうが攻撃をし、手を操る方が守る、という構図が出来上がっている。

事ここに至つて、漸く裕介は自らの答えを認めた。

裕介の出した答え、一人の攻防の何が違うといった

即ち、二人は全く手加減をしていないのだ。

戦いなのだから手加減をしないのが普通だ。しかし、これは普通ではない。

あの一人の能力は、いや、この世界にいる殆どの能力者たちは人を

殺す事など容易いのだ。

そんな、人を死に至らしめるなど容易な能力を、惜しげもなく使い、戦っている一人。

それが、裕介が違うと思ったことだった。

裕介は、いや、優衣もまた、この戦いの事を深く理解していなかつた。

そう、これは、一種の戦争。

人の命など、簡単に消し飛ぶ。

二人はこの光景を見てやつと、これが戦争だという事を実感させられた。

神が最初に言つていた。

お前には戦場に行つて勝ち残つてもうつ漸く裕介の中に溶け込んだ。  
その言葉が、

優衣が最初に言つていた。

戦いに負けた人の精神は、肉体に戻されて今までの生活に戻る  
その意味を、裕介は理解した。

これは、ある種のリミッター外しだ。

能力を全力で使えば、ソレは人が死ぬ威力を内包している。

故に、全力を出し切る事は出来ない。

しかし、相手を殺しても問題ない、事後処理がなされると分かっていたらどうだろ？

答えは簡単。

相手を殺しても血口を正当化出来るのならば、全知全能を以つてして、相手を殺す。

現代のドラマやアニメなどの作品では、簡単に人が死ぬ。

それにより、今の人間は死に對して頓着が無いのである。

寧ろ、自分も人を殺してみたいと思っている人間がいてもおかしくはない。

そういう人間達が繰り広げる戦いは、残虐かつ冷酷である。

裕介が隣にいる優衣を見ると、優衣もまた、言葉を失っていた。

寧ろ、目に涙を溜めてすらぐる。

今まで裕介たちが接してきた普通とは、明らかに違ったこの状況。

そうして数刻の攻防が過ぎ、更なる絶望が裕介たちを襲う。

それはたつた、そう、ただの一言だけであった。

突然攻防が止んだかと思つと、手を操る能力者が相手に話しかけた。

「なあ、もうそろそろ無駄な争いはよさないか」

いきなり喋りだしたかと思うと、そんな事を言い出す相手に、巨大化の能力を持つ能力者は怪訝に思つ。

が、しかし、その話の振り方に興味を持ったのか、話に応じた。

「一体何の事だ？」

話しかけた方は、答えが返ってきたことに満足したように続ける。

「何、ここまで派手に戦っているんだ。他の連中が駆けつけてくるかもしねえ。いや、もしかしたら、もう駆けつけていてさつきの戦いを見られている可能性だつてある」

その言葉に、裕介と優衣はびっくりと震えた。

「そしてもしそうだつた場合、このままいくと、残つた方は満身創痍。そこを襲われたら碌な抵抗が出来ないだろうな」

「確かに」

くつくつと笑う事によつて同意を示し、先を促す男。

「そこでだ、一つ提案がある」「

その提案は、裕介たちを愕然とさせるに相応しいものだった。

「

問題を、組まないか？」

## 第一十話 最悪の展開（後書き）

こんには、アオです。

今回はちょっと新しめの書き方に挑戦してみました。

実はこういう文章は結構好きです。でも、今回で疲れました。もう書きたくない。読む専門でいきたい・・・。

そして、今話で物語は新たな展開を迎えました。

この戦いの本質は、基本殺し合いになります。

極力ソフトな書き方にしますが、そういうのが苦手な方はご遠慮ください。

今まで、「戦いにしては空気が温くないか?」と思つていた読者の皆様、「ご安心を。今までのは所謂プロローグみたいなものです。」プロローグはもうあるじゃん」というツッコミは断固受け付けません。こつからが本番です。

あ、あと、これから主人公は割りと汚い手とかを使うので、そういうのが嫌いで「俺は正統派なんだ!」という方も、「ご遠慮ください。

評価・感想などお待ちしております。

それでは。

## 第一十一話 最凶の同盟（前書き）

最近忙しく、更新が遅くなつてしましました。

今回は、前半部分は他者視点、後半部分は裕介視点となります。  
前回みたく三人称視点一辺倒というわけではございません。

## 第一十一話 最凶の同盟

「同盟、だと？」

俺が持ちかけた提案に、眉を顰める巨大化の能力者。

「同盟なんて組んで、それで一体俺に何の得がある？」

「分からぬいか？さつきも言つたように、これ以上の戦いは不毛だ。そして、この戦いを勝ち残る率を上げるには同盟を組むのが一番だ。

そり、お前に利はあるだろ？」

「俺が言つてゐるのはそういう事じゃがない」

「ふむ、では一体どうこう事だ？」

相手の言いたい事は分かるが、ここで俺はあえて、相手に自分を無知に見せる。

「確かに、お前がいれば勝率は上がるだろ。だけどだ、俺は信用できないやつに背中を預けるほど醉狂なやつじゃない。俺が眠つている間にお前が俺を襲わない保証は何処にある？」

「何だ、そんな事か？」

俺は、それがどうしたと言わんばかりに息を吐いた。

「だったら、昼間だけの同盟関係でいいだろ。夜はお互に別々に

行動する。

「これでいいか？」

俺の出した提案に考え込む相手。

先程のように少し頭を悪く見せれば、こけらの提案を呑む確率は高くなる。しかし、自分は相手より頭が回る事も 少なくとも作戦を立てられる程度には アピールする。

頭が回りすぎると警戒されるが、適当に回れば、それは相手の信頼を得ることが出来る。

そして、数分、相手は悩んだ末に結論を出した。

「 分かつた、お前と組もう」

よしー！

俺は内心で喝采を上げながら、表面上は平静を取り繕つた。

「それじゃあ今更だが自己紹介をしようか。俺の名前は手縛修平てぶりじゅうへい

お前は？」

「俺は、おおいしあきり大石亮だ」

「やうか、よろしくな大石」

形式上、握手を求めてそれに相手も応じる。

お互に相手のことは何一つ信頼してはいないが、これは同盟を組

んだといつ上つ面だけの挨拶。

お互にがお互いを利用し合おうとしているのは明白だ。

だが、最後に笑うのは俺だ。

先程のやり取りの中で、お前が俺に頭でぶつけてるのは既に知れた。  
お前はそれでも俺をどうとか出来ると思ったようだが、それは間違  
いだ。

そしてわざの戦い、お前は能力を見せすぎた。

俺の能力もこの先、必要に迫られたら全てを披露せざるをえないが、  
それでもまだ俺の優位は揺るがない。

さて、取り合えず今やるべき事は一つかな。

「じゃあ大石、同盟を組んだわけだし、先ず最初にやりたい事があ  
るんだが、いいか?」

「何だ?」

「ああ、さつき言つただろ。『他の連中が駆けつけてくるかもしれ  
ない。いや、もしかしたら、もづ駆けつけていてわざの戦いを見  
られている可能性だつてある』と

「なるほど、つまりは

「

大石も気付いたようで、口角が吊りあがつている。

「ああ、先ず最初に

いけない鼠を駆除しようか」

その言葉を言い終ると同時に、俺は能力を発動させる。

「アースハンド  
第二の手」

俺は大石を巻き込まないよう 俺はお前を攻撃するつもりはないという意を込めて 周りを一掃する。

美しい景観も、今ではすっかり過去形となつた。

大石も俺に続くように、小石を巨大化させて破壊している。

それから一分もしないで、俺達は破壊をやめた。

「 最初からいなかつたのか、それとも逃げ足が速いのか」

俺がそう呟くと、大石は肩を竦めた。

「さあな、だけど取り合えずはここを離れよう。流石に立派なさぎだ」

俺は大石の提案に頷きを返してその場を後にした。

【s.i.d.e - 裕介】

「 同盟を、組まないか?」

その言葉が発せられた後、俺は凍りついた。

嘘だろ、このタイミングで？

突然の提案に当然眉を顰める巨大化の能力者。

しかし、最初こそ疑問に思つたが、この提案が受け入れられる可能性は高かつた。

先ず第一に、手<sup>アイツ</sup>操る能力者は他の人間、第三者が来る可能性を提示した。

そしてその相手と鉢合わせになつてしまつた時、バトルロワイヤルで戦うよりタッグで戦つた方が何倍もいい。例えそれが、つい先程まで自らを倒そうとしていた敵だとしてもだ。

そして次に、俺達がいる可能性、つまりは偵察者がいる可能性を示した。

その場合、それ以上の戦いは一人にとつて百害あって一利なしだ。

それに、戦つて一人が残つたとしても、さつき手<sup>アイツ</sup>操る能力者が言つたように、残つた方は満身創痍だ。もしかしたら、魔力も無くなつてるかもしねり。

つまり、以上の事からこれ以上の戦いはほぼ確実<sup>ナンセンス</sup>にない。

そしてそうなつた場合、一人はその場を離れたいが、お互い背中を見せたくない。

よつて、この同盟の話を呑めば、一人は安全且つこれから先を生き残れる可能性が大いに上がるのだ。

俺がそんな事を考えている間に一人の会話は続いていく。

そして、数分間の沈黙があつた後、俺は絶望的な一言を聞く事になつた。

「 分かつた、お前と組もう」

やはり、組んでしまつたか。

俺は内心舌打ち、これからどうするかを考えた。

あいつらと戦うなら、二人いるときに仕掛けるのは愚策だ。

だから、必然的に夜。 それぞれが別行動を取つた時に限られる。

しかし、それは直ぐにはやらない方がいいだろう。

あいつらがいれば、他の参加者達が消える可能性が大いにあるのだから。

そもそもとして、優衣の能力は補給が利かないからあまり無意味な戦いはしたくない。

それと、優衣みたいな女の子にはあまり戦いなんて経験させたくない。

まあ、こんな事を面と向かつて言つのは恥ずかしいし、何より、

本人が異論を唱えそうだから絶対に言わないが。

と、そんな事を考へてると、二人は自己紹介を終えたようだつた。

どうやら巨大化の能力を持つ方は大石亮おおいしゃきりょう、手を操る能力者は手繩修てくじゅうしゅう平へいと言ふらしい。

二人はお互に握手を交わし、傍目には関係良好そうに見えなくもないが、俺にはあの二人がお互に付け込もうとしているのが分かつた。

能力は脅威だが、信頼関係はまるで無い。付け入るならここかな。

と、俺が一人を倒すプランを練つていると、突然、手繩が悪寒の走る笑みを浮かべた。

「じゃあ大石、同盟を組んだわけだし、先ず最初にやりたい事があるんだが、いいか?」

「何だ?」

「ああ、さつき言つただろ。『他の連中が駆けつけてくるかもしれない。いや、もしかしたら、もう駆けつけていてさつきの戦いを見られている可能性だつてある』と

「なつ！？まづい！」

俺は手繩が何を言いたいのかを理解し、そして大石も理解したようだつた。

「ああ、先ず最初に いけない鼠を駆除しようか

これから起るであろう事態の予測は容易にすべ。

俺は優衣の手を握って走り出した。

「裕介君！？」

「逃げるぞー！」のまま此処にいちゃ 危険だ！』

俺達が走り出すのと同時に、背後から破壊音が聞こえてくる。

俺達とあいつらとの距離は20m程しかなかったので、このままだつとしていたら直ぐアレに巻き込まれてしまつ。

俺は脇目も振らず、一心不乱にその場を走り去つた。

## 第一十一話 最凶の同盟（後書き）

「こんには、アオです。

この後もう一話投稿すれば、この章は終わりとなります。  
しかし、もう一話投稿と言いましても皆さんのが期待しているような  
ものではなく、所謂、設定集みたいなものです。

次章からはそれなりに本格的な戦闘があるかもです。

あと、皆様に伝えとかなければいけない事が。

前回の後書きにて「これからが本番」だと、「主人公は汚い手を  
使う」とか書きましたが、若干の語弊が・・・。

あの言い方だと、これからずっと戦いっぱなしと思われたでしょう  
が、別にそういう事はありません。

この事で自分が言いたいのは、次章からは確かに戦いは激しくなっ  
ていくけど、戦いばかりじゃないよという事です。

そして次に主人公の戦い方ですが、勿論汚い手は使います。ええ使  
いますとも。

ただ、やっぱり主人公ですから、それなりに熱い戦いもさせます。  
ただ基本スタイルが邪道というだけです。

なので、そこら辺を期待している方もありますがつかりしないように  
心構えをしといてください。（といってもそういうのはまだ随分先  
ですが）

評価・感想などお待ちしております。

それでは。

## 能力者レポート（前書き）

これは所謂設定集と言いますか、キャラクター紹介と言いますが、とにかくそんな感じです。

一応、これは裕介が参加者の詳細をレポートに纏めたという設定です。なので書き方にも裕介の主観などが入っています。でも、実際はレポートなんぞ書いてないので、あくまで“そういうもの”という認識でお願いします。

## 能力者レポート

残り参加者：7人 既知：4人（自分を除く）

### 参加者プロフィール

名前：**進藤優衣**

性別：女

年齢：17歳

外見：身長は160cm近くと、この年齢の一般身長からすれば高め。髪の毛は黒くて癖が無く、背中の肩甲骨よりちょっと下まで伸びている。実は地味に胸が大きめ、着やせするタイプと見た。

能力名：**切り札**

能力：各絵柄にはそれぞれ固有の能力があり、それを駆使する。  
スタート

能力値には数字によつて差があり、上から

A < K < Q < J < 10 < 9 < 8 < 7 < 6 < 5 < 4 < 3 < 2 となつてゐる。

スピード：騎士ファイアは戦場にて散る

トランプを爆発させる能力。4つの絵柄中、攻撃の役割を持つ。

ダイヤ：魔**ヘンタクル**を払いし護符

トランプが盾の形状を取り、攻撃を防ぐ能力。4つの絵柄中、防御の役割を持つ。

但し、防げる値は限定数値でそれ以上の攻撃を受けると、数字分だけ能力を減衰させた後、霧散する。

ハート：傷を癒す聖なる光

トランプから光が発せられ、傷を治したい部位に当てるで傷を治す能力。4つの絵柄中、回復の役割を持つ。

傷は基本的に体の内側から治るが、優衣が操れば表面から治す事も可能。但し、これもダイヤと同じく、治せる範囲が限定数値である。

補助能力：数値化

自分が視認したものの能力値を数値化する能力。

これにより、相手の能力の強さに応じたカードを選出する。

考察：おそらく今回の戦いにおいて最優の能力。しかし、能力が消耗品なため連戦には向かない。

名前：炎道焰  
えんどうひめり

性別：男

年齢：？歳（推定16・7歳。おそらく俺と年はそう変わらない）

外見：一般平均より若干太っている体躯。将来は中肉中背の有望株。身長は160ちょい位で優衣より少し高め。体力はそれほど無さそう。

能力名：発火能力

能力名：フレイムロード

能力：炎の一本道

自分が視認した箇所へ炎を疾らせる能力。

補助能力；不明

考察：見た目通りの愚鈍な動き。俺が優衣を抱えて走つてもまだ余裕があつた。能力は危険だが、その他のスペックはそれほど気にしなくてもいい。

対応策：背後からの奇襲による攻撃。正面切つて戦うには相性が悪いので、一撃で倒さなくてはならない。

名前：手繩修平

性別：男

年齢：？歳（推定16・7歳。おそらく俺と年はそつ変わらない）

外見：長身な体躯（大体180cmくらい）にすらりと伸びた長い脚、そして整った顔立ちと所謂イケメン。男としてコイツは気に入らない。時折見る葉歯の煌めきを見ると無性にムカつく。歯あ全部折つたろか？

能力名：第三の手アースハンド

能力：自分の周りの地面を手の形に変え、操る能力。その豪腕が放つ一撃は、一瞬で周りを一掃するほど。

補助能力：不明

考察：顔もよく、身のこなしもよく、能力もいい。そして頭まで回るというチート参加者。大石とは同盟関係にあるが、関係はそこまでよろしくない様子。

対応策：同盟関係は昼間だけらしいので、夜一人になつてからの奇襲攻撃。能力上、手の動きはそれほど速くないので、少しの間だけなら一対一での戦闘も可能。

名前：大石亮おおいしゃきら

性別：男

年齢：？歳（推定16・7歳。おそらく俺と年はそつ変わらない）

外見：髪の毛は短く、おそらくは坊主頭から伸び始めたと見られる。身長は170中盤くらいで、体つきもしっかりしている。石の投げ方を見るに、おそらく元野球部。（元と付くのは、頭が坊主ではない事が理由に挙がる）

能力名：**巨大化**  
ジャイアント

能力：物を巨大化させるだけのシンプルな能力。戦闘スタイルは、いくつか持っている小石を相手に向かって投げつけ、それを巨大化させるというもの。

補助能力：不明

考察：能力はとてもシンプルだが、元野球部という事も相まって、対策が難しい。小石を投げる速度がとても速いので、回避が難しく、手繩も防御に専念せざるを得なかつた。手繩とは同盟関係にあるが、関係はそこまでよろしくない様子。

対応策：同盟関係は昼間だけらしいので、夜一人になつてからの奇襲攻撃。そして、戦う場所は障害物が多い場所がいいので、？森？エリアか？水源？エリアで戦うのがいいと考える。また、巨大化させたものは質量も上がるるので、それを狙うことも出来る。

## 能力者レポート（後書き）

今回のようなものは、これから各章が終わる時に纏めとして載せようと思います。

あと、今回は参加者だけでしたが、他にも書くつもりです。

今章はこれで終わり、次からは次章に入ります。

・・・が、まだ次章のタイトルが決まってません。すいません、何かいいつもこんなで・・・。

なので、前回同様タイトルは“未定”とし、決まり次第、変更させていただきます。

あと、もう一つ「」報告が

これから自分、暫くの間更新を休止します。

多分ですが、次回の投稿は12／10（土）辺りになります。（例え変更があったとしても、投稿が早くなるだけです。遅くはなりません・・・何も無ければ）

詳しい内容については、活動報告にて書きますので、そちら辺もつと詳しくといった方はお読みください。

というかですね、いい加減後書きがいつも長いんだよと思つている方も多いそうなので、今度からは重要な話とかは活動報告に書きたいと思います。

一時休止などの報告は一応後書きでさうと書きますが、詳しい事はあつちで、みたいな感じです。

何か更新が停滞してるなあ、と感じたりした場合、そつちを見ていただけたら謎が解消するかもです。

評価・感想などお待ちしております。

それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8153w/>

---

超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！

2011年11月23日14時52分発行